

教育と経済・社会を考える
第12回 暗黒の情報社会と教育
—近代化・産業化の果てに来るもの—

福田光宏

1. マクドナルド化とスーパースター現象

ジョージ・リッツァは『マクドナルド化する社会』で、「ファストフード・レストランの諸原理がアメリカ社会のみならず世界の国々の、ますます多くの部門で優勢を占めるようになる過程」を「マクドナルド化」と名付け、「マクドナルド化の影響はレストラン業界にかぎらず、……社会のすべての側面に及んでいる」と述べ（P.17-18）、「マクドナルドは消費者、従業員、そして店長に効率性、計算可能性、予測可能性、そして制御を提供できたことによって成功を収めたのである」と指摘している（P.30）。「予測可能性」とは「商品とサービスがいつでも、どこでも同一であるという保証」であり、「マクドナルド化したシステムの従業員は予測可能な仕方では振る舞う。……マクドナルド化した組織は、従業員が覚えることになっていたり、特別の出来事が起こった際に従うことになっているマニュアルを備えている。このマニュアル化された行動は、従業員と客の相互作用における行動を予測可能なものにするのに役立っている」（P.32-33）「客と従業員双方が口にし、また実際に行っていることのほとんどは儀礼化され、ルーティン化され、マニュアル化されている」（P.138）「客の側にマニュアルはないが、……彼らも予測可能な行動をとりがちである。客に予測可能な行動をとらせるのは次の三つの要因によっている。第一に、客は自分に期待されているものが何かを示す手がかり（たとえばたぐさんのゴミ箱の存在など）を受け入れる。第二に、さまざまな構造上の制約が、ある一定の方法で行動するように客を誘う。たとえば、ドライブスルーの窓口は、入口などのメニューボードに書かれた指示とともに、客にはほとんど選択肢をあたえないようにできている。そして最後に、ファストフード・レストランに入った客が守らなければならない自明の規範がすでに客たちに内面化されている。たとえば、わたしは、子どもが小さかった頃、食べ終わったあとのゴミを片づけず、トレイをゴミ箱までもっていかずに帰ろうとしたのを子どもにたしなめられたことがある」（P.140）。「制御」とは「人間技能の人間によらない技術体系への置き換え」（P.34）であり、「マクドナルド化は、従業員と客の双方にたいする制御の方法をたえず探し求めてきた。人間を管理するため、長い年月をかけて技術体系が開発され普及してきた。これがもっと進み、さらに極端になると、……人間は、しだいに人間によらない技術体系へと置き換えられていく。なぜなら、ロボットやコンピュータは、人間よりも制御するのがずっと簡単だからである。……技術体系には、ロボットやコンピュータや作業ラインのような目に見えるものだけでなく、官僚制的な規則や、認められている手順や技法を指令するマニュアルなど目に見えない

ものも含まれている。……人間の行動は、いったん制御されると機械的な行動に変わり始める。そして、ひとたび人間が機械のように行動しはじめると、人間はいとも簡単にロボットなど本物の機械にとって代わられる。……高度な技能……が必要なときでさえ、ファストフード・レストランは、その技能をだれもができるようないくつかの簡単な手順による反復作業に変えてしまう。……指示されたステップを順序どおりにたどっていけば、調理にともなう不確実性の多くを取り除くことができる」(P.165-167)。

また、ジョージ・リッツァは、「マクドナルド化にはそれに先んじた、そして……マクドナルドに基本的な性格を与えた一連の展開が先行していた」と指摘し、官僚制化とマックス・ウェーバーがその中で見いだした形式合理性と「合理性の鉄の檻」、フレデリック・W・テイラーによって発明された科学的管理法、ヘンリー・フォードの作業ライン、大量生産方式による郊外住宅、ショッピングモールを挙げる (P.45)。この中で最も重要なのは、官僚制化、形式合理性、「合理性の鉄の檻」である。

マックス・ウェーバーの……官僚制についての……考えは、……合理化過程の理論に組み込まれている。この理論の中でウェーバーは、いかにして欧米がしだいに合理的になっていったか——つまり、効率性と予測可能性と計算可能性と人びとを制御する人間によらない技術体系によって支配されていったか——を記述している。……マクドナルド化は、ウェーバーの合理化理論の拡張である。ウェーバーにとって、合理化のモデルが官僚制であった。……ウェーバーは、その研究のなかで、近代西欧世界が特有な合理性を生み出してきたことを論証した。……ウェーバーが形式合理性と呼んだ類型はそれまでにどこにも存在したことがない。……形式合理性とは、与えられた目的に対して最適な手段を探ることが、規則や規定やより大きな社会構造によって共有されていることを意味する。……人びとはある目的にとって最適な手段を自分の手で見つけ出す必要はもはやなかった。むしろ、最適な手段はすでに発見されており、規則や規定や構造に制度化されていた。人びとはそれらに従いさえすればよかったのである。……

官僚制は、人間の技能を人間によらない技術体系に置き換えることによって、人々を制御することを強調する。……官僚制にみられる自動制御運転に近似した性質は、人間による判断を規則や規定や構造の命令に置き換える画期的な試みとみなすことができる。従業員は分業によって管理されており、……組織によって規定された方法でその職務だけをしなければならない。多くの場合、彼らは作業の遂行にあたって特異な方法を編みだしたりはしない。さらに、判断を下さない(判断を下すなどということとはめったにない)ということになっていけば、人間はますます人間ロボットかコンピュータに近くなる。人間の地位が引き下げられてしまえば、人間を実際に機械に置き換えるなどという考えも可能性を帯びてくる。この可能性はすでにある程度まで実現されている。……官僚制のクライアントも管理されている。彼らは組織から一定の

サービスを受け取るが、それ以外のサービスを受けることなどありえない。……官僚制はそこで働いている者にとっても、またそこからサービスを受け取る者にとっても、みずからが脱人間化されつつある場所である。

ウェーバーは、……「合理性の鉄の檻」に非常に強い関心をいただいていた。……官僚制は人びとを囚え、人間性の基本を否定するという意味で檻なのである。……ウェーバーは、人間社会がひとつながりの合理的構造に包み込まれてしまい、人びとはある合理的システムから別の合理的システムへ移動していくにすぎなくなると予測した。そうなってしまうと、人びとは合理化された教育制度から合理化された職場へ、合理化されたレクリエーション施設から合理化された家庭へと移動することになる。……そうなる逃げ道はないのだ。……レクリエーションは、日常ルーティンの合理化から逃れる方法である。しかし……そうした逃避のルートそのものが、……合理化されてしまっている。……パック旅行が旅程を合理化する。人びとは、厳密に管理された方法で、観光地を便利に旅行し、ホテルに泊まって、……ファストフード・レストランで食事をし、そして多くの観光を効率よく実行する。……自然に戻りたいと願う人たちに用意されている合理的なキャンプ場は、自然の予測不可能性との接触をほとんど、あるいはまったく提供しない。人びとは自分のRV車にのったまま、家庭での快適さ——テレビ、ビデオ、ファミコン、CDプレーヤー——をぜんぶ楽しんでいる。……人びとにとって、合理性という鉄の檻のなかで生きる以外にほとんど、あるいはまったく方法がないということだ (P.47-52)。

「形式合理性とは、与えられた目的に対して最適な手段を探ることが、規則や規定やより大きな社会構造によって共有されていることを意味する」というのは、ジョージ・リッツアの解釈である。マックス・ウェーバーが用いている「形式合理性」の概念はあいまいなので、ジョージ・リッツアの解釈は間違っていると考える人がいるかもしれない。しかし、私は、「形式合理性」をジョージ・リッツアのように解釈することによって、欧米社会における合理性の特徴を正しく把握し、欧米社会は「記号的権威システム」に支配されている（「7.人間と自然の「標準規格化」」「8.権威への依存」参照）ということを理解できると考えるので、ジョージ・リッツアの解釈にしたがうことにする。

「合理性という鉄の檻のなかで生きる以外にほとんど、あるいはまったく方法」がなくなりつつあるが、どの檻（標準規格）のなかで生きるのかという選択の自由は残されている。複数の官僚制的な大学の中から一つを選んで進学し、複数の官僚制組織の中から一つを選んで就職し、複数のパック化されたレクリエーションの中からいくつかを選んで楽しむことができる。人びとは、どの檻のなかで生きるのかという選択の自由を過大評価し、自分たちは自由だと思い、社会は多様化していると考えるのである。しかし、複数の官僚制的な大学、複数の官僚制組織、複数のパック化されたレクリエーションと言っても、その根幹部分は「標準規格化」されており、多様性は表面的なもの、言わば、

飾りに過ぎない。多様な商品の氾濫という表面的な多様性の増大の奥底で、世界の「標準規格化」が進んでいる。しかも、この選択の自由は、「形式合理化」された教育によって身につけた「標準規格化」された判断基準（利益・効用の最大化を図るべきだというような考え）と「標準規格化」された情報に縛られているという意味では、本当の自由ではなく、また、複数の檻のうちのどれに入るかという自由でしかなく、全ての檻を拒否して、檻の外で生き、真の自由を手にするにはできない。現代には偽物の多様性と偽物の自由しかないのである。人びとが「合理性という鉄の檻」に完全に閉じこめられ、「標準規格化」されて自由を失ったとき、人間の行動は予測可能となる（「7.人間と自然の「標準規格化」」参照）。

「形式合理性」を押し付け、自由を奪う学校に反抗して、不良行為に走っても、そこにも自由はない。暴走族に見られるように、そのグループ特有の規格化された思考と行動のパターンに縛られており、自由に行動していないのである。不良とはこうあるべきだという慣習や「しきたり」に縛られ、みんな同じようなことをしている（「7.人間と自然の「標準規格化」」参照）。明文化された規則に反抗して、明文化されていない規則に縛られているだけである。学校という檻から抜け出すと、不良グループという檻に閉じ込められるのである。

官僚制以前の組織においても、自分で判断を下すことはほとんどなく、慣習や「しきたり」という明文化されていない規則に縛られて仕事をしていた（「5.「情報の複製過程」を価値あるものと思わせてきた仕組みの破壊」参照）。「最適な手段はすでに発見されており、慣習や「しきたり」に制度化されていた。人びとはそれらに従いさえすればよかったのである」ということである（慣習や「しきたり」が非合理的なものであるというのは、「形式合理性」を身につけた後世の人びとの判断であり、当時の人びとにとっては合理的なものであった）。つまり、「形式合理化」とは、明文化されていなかったものを明文化すること（「記号化」）であり、明文化されたことにより、人びとは自分が「合理性という鉄の檻」に閉じこめられていたことに気づくのである。

なお、昔は、どの「慣習という鉄の檻」、あるいは「しきたりという粘土製の檻」（「第13回 日本社会の特殊性と教育 3.「空気」の支配」参照）の中で生きるかは生まれによって定められ、選択の余地はなかったという点では、どの「合理性という鉄の檻」の中で生きるかを選択する余地があるだけ、現在の方が自由である。ただし、どの国家という「合理性という鉄の檻」の中で生きるかは生まれによって定められ、選択する（国籍を変える）ことは困難である。

Sherwin Rosen は“*The Economics of Superstars*”で、印刷・出版、映画、ラジオ、テレビ、レコードなどの複製技術や交通手段の発達の結果、多数の人々がトップレベルの文学、芸術、芸能、スポーツなどを安価で容易に鑑賞できるようになった（逆に言うと、少ない手間で多数の消費者に作品等を提供できるようになった）結果、トップレベルの才能を持つ人（スーパースター）に需要が集中して、トップレベルでない人との収

入の格差が大きくなったと指摘している。情報技術の進歩により、トップレベルの文学、芸術、芸能、スポーツのコピー（本、テレビ・ラジオ放送、CD、DVD など）を大量に生産できるようになり、そのコピーを安価で容易に鑑賞することができるようになった消費者は、トップレベルで無いものにお金を出してまで鑑賞する気を無くしてしてしまう。また、交通手段の発達の結果、大ホールで行われるコンサートや大球場で行われる試合などに容易に足を運べるようになった消費者は、近くで開催されるものであってもトップレベルで無いものにお金を出してまで見に行く気を無くしてしまう。その結果、どき回りなどでは、生活できなくなってしまうのである。なお、本当にトップレベルの才能があるかどうかではなく、大衆がそう見なすかどうかということ、つまり、人気があるかどうかが決め手になるので、人気を集めて高収入を得るか、人気を得られず低収入に甘んじるかはギャンブル的なものになる。

私は、このスーパースター現象は、文学、芸術、芸能、スポーツだけでなく、すべての分野に及んでくると考えている。トップレベルの情報以外は誰も消費してくれず、トップレベルの情報創造能力が無いと、それで生活の糧を得ることができない時代である「暗黒の情報社会」が来るのである。高度な教育を受けていても、トップレベルの情報を創造できない人間は不要となる時代が来る。高度な教育を受けることは、一か八かの賭けとなる。芸術家になることが、生活の糧を得るという面では、一か八かの賭けとなってしまうのと同様である。

「マクドナルド化」と「スーパースター現象」はコインの裏表のような関係にあり、近代化・産業化（工業化）の究極の姿、言わば、「超近代」、「ハイパー産業化」の結果（私は「暗黒の情報社会」と呼ぶ）である。このことを理解してもらうためには次のことを説明する必要がある。

- ①「情報」とは「物質－エネルギーの時間的・空間的、定性的・定量的なパターン」であること
- ②財・サービスの生産過程は「情報」の創造とその複製という2つの過程からなること
- ③近代化・産業化の本質は「情報の複製」の容易化、高速化、正確化（複製の誤りをなくすということ）による「効率性」の追究（あるいは、生産力の増大）である、つまり、近代化・産業化は、実は情報社会化であったということ
- ④「情報の複製」の容易化・高速化・正確化が進行すると、「情報の複製」を担当する者の価値が下がり（あるいは、「情報の複製」の「機械化」の結果、不要となり）、「情報の創造」を担当する者の価値が上がるということ
- ⑤「情報の創造」を担当する少数の成功者も、その成功が長続きする保証はなく、いつ敗者に転落しても不思議ではないという不安を抱き続けなければならないということ

- ⑥「情報の複製」の容易化・高速化・正確化は、「記号化」、「機械化」、「標準規格化」、「細分化」、「高速化」によって進められていること
- ⑦「記号化」、「機械化」、「標準規格化」は「計算可能性」、「予測可能性」、「制御」をもたらすこと
- ⑧人々は「記号化」、「機械化」により記号と機械に支配され、「標準規格化」により「擬似ロボット化」されて、自由を失い、「細分化」により世界の全体像の把握が困難になること

工業社会の次に情報社会や知識社会が来るのではない。機械や化石エネルギーの利用という目に付きやすい存在に惑わされ、工業社会の本質が情報社会や知識社会であったことに気づけなかったのである。「ロボットやコンピュータや作業ラインのような目に見える」ものだけを見ては工業社会や情報社会の本質は見えない。「官僚制的な規則や、認められている手順や技法を指令するマニュアルなど目に見えない」ものを見る必要がある。

なお、ガブリエル・タルドは『模倣の法則』（P.270-273）で、「模倣された行為や観念が文明化の過程で増加し、複雑化していくにつれて」、儀式と手順の厳格化などにより、「模倣の正確性は増大する」、つまり、文明化するにつれ、「情報の複製」は正確化すると指摘している。「情報の複製」の容易化と正確化は、近代化、産業化における傾向だけではなく、文明化すべての傾向である可能性がある。しかし、近代化、産業化によって、「情報の複製」の容易化と正確化が急速になったことだけは確かである。

2. 情報とは何か

吉田民人氏は、『情報と自己組織性の理論』（P.114-124）で、以下のような情報概念の整理を行っている。

①最広義の情報概念

「物質－エネルギーの時間的・空間的、定性的・定量的なパターン」

物質・エネルギーの配置、布置、配列、順序、組合せ、形、関係、構造、形態、形相など。パターンとは、<秩序－混沌>の視角からとらえた物質・エネルギーの属性。例えば、原子は素粒子とその結合のパターン、タンパク質はアミノ酸とその配列のパターン、機械は素材とその設計のパターン、感覚はニューロン（神経細胞）連鎖とその興奮・抑制のパターン、話し言葉は音響エネルギーとその時間的パターン、書き言葉は印字物質とその空間的パターン。

②広義の情報概念

「パターン表示を固有の機能とする物質－エネルギーのパターン」

遺伝子 DNA のパターン、インクのパターン（つまり文字）のようなもの。DNA は、

生命体、タンパク質のパタンを表示することを固有の機能とし、文字は、言葉のパタンを表示することを固有の機能としている。なお、文字は狭義の情報概念にも該当する。

パタン表示を固有の機能とする物質パタン（遺伝子の塩基配列、文字など）を「記号」と呼び、それが表示しようとしているパタン（アミノ酸の配列のパタン、言葉のパタンなど）を「意味」と名付ける。

「記号」を「シグナル」と「シンボル」に分類する。「シグナル」は記号パタンと意味パタンとが因果的ないし相関的に連結する「記号」であり（例えば、遺伝子の塩基配列）、「シンボル」とは、記号パタンと意味パタンとが因果的・相関的に連結せず、規約的に連結する「記号」をいう（例えば、文字。文字と意味の関係は人為的・恣意的なものである）。

③狭義の情報概念

「広義の情報概念のうち、伝達、貯蔵、ないしは変換システムにあつて認知、評価、ないし指令機能を果たす有意味のシンボル集合」

文字の集合、つまり、文章など。変換システムとは、情報の処理を行うシステムのこと。

④最狭義の情報概念

「決定前提（意思決定を規定する認知・評価・指令情報ならびに決定ルール）を規定する（決定前提を構成するか、またはそれに影響する）有意味のシンボル集合」

意思決定に必要な記号のこと。意思決定をするためには、現状についての認知情報、認知された現状についての評価情報、現状において代替可能ないくつかの指令情報（このような行動をとれという指示など）、各指令情報の遂行がもたらす結果についての認知情報、認知された各結果についての評価情報、そしてなんらかの決定ルールないし選択原理（利潤の最大化を図れなど）が必要であり、これらの情報のことを「決定前提」と呼んでいる。

一般には、情報とは記号、その中でも何かの役に立つ記号であると考えられることが多い。吉田民人氏の分類では、広義、狭義、最狭義の情報概念である。最広義の情報概念「物質－エネルギーの時間的・空間的、定性的・定量的なパタン」は情報とは呼べない、そこから情報を得るもの、あるいは、それを使って情報を作るものであると考えるのが一般的であろう。しかし、私は、最広義の情報概念「物質－エネルギーの時間的・空間的、定性的・定量的なパタン」こそが情報の本質であると考え。物質とエネルギーは複製できないが、パターンは複製できる。例えば、大量生産された同一型式のテレビは、物質としてはそれぞれ別のものである（複製できない）が、パターン（テレビの構造）としては全て同じである（複製できる）。パターンを複製できるということは、パ

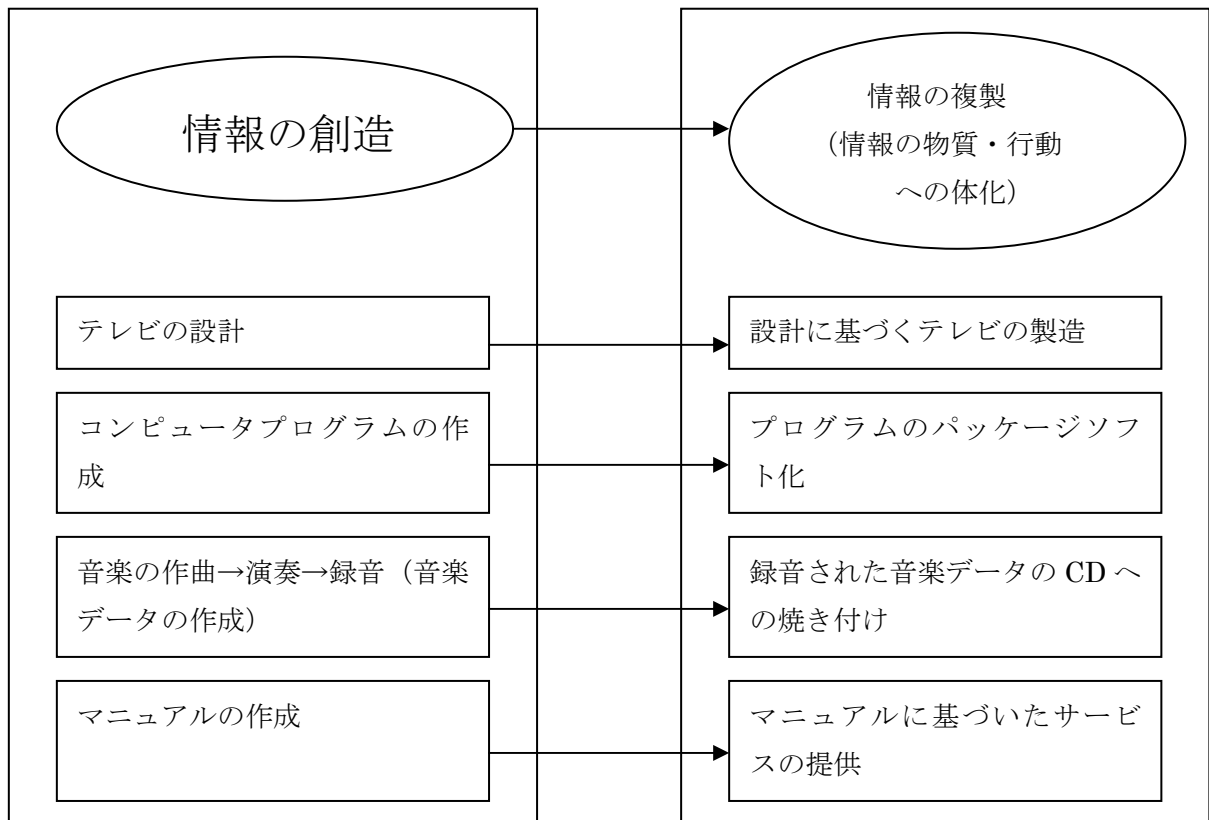
ターンは、物質・エネルギーから切り離して別の物質・エネルギーにうつすことができるという意味で、物質・エネルギーから独立したものであるということである。したがって、物質・エネルギーのパターンを物質・エネルギーそのものとは違うものであるとして扱う必要があるので、それを情報と呼ぶべきなのである。

そして、私は、広義の情報概念「パターン表示を固有の機能とする物質-エネルギーのパターン」を記号と呼ぶべきであると考えている。物質・エネルギーのパターンである情報の複製を容易にする、つまり、複製に要するエネルギーを減らすために、人間などの生命体は、記号を必要としたのである。例えば、生命体は、自己の増殖（生命体の増殖とは、自己と同じパターンを持った生命体を増やす、つまり生命体のパターンを複製することである）を容易にするために遺伝子 DNA を必要とし、人間は他人の行動を模倣する（行動の模倣とは、同じパターンの行動をする、つまり、行動のパターンを複製することである）ために言語を必要としたのである（例えば、医療技術のように、見よう見まねだけでは習得できず、言語による学習が必要な技術がある）。

記号は、パターン表示を固有の機能としているため、物質とは別にパターンが存在しているということが容易に理解できる。例えば、紙とインクという物質とは別に文字というパターンが存在しているということは直ぐに分かる。そのため、一般の人々は、情報とは記号であると誤解してしまうのである。

3. 情報の創造過程と複製過程

私は、財・サービスの生産過程は、情報の創造とその複製という2つの過程からなると考えている（私が書いた『情報と社会』の「Ⅲ 情報の外在化」「Ⅳ 財・サービスの生産・消費過程の情報という観点からの再考察」「Ⅵ 情報資本主義的な情報社会観と情報社会主義的な情報社会観」でも同様のことを説明している）。



一般に情報財と呼ばれているコンピュータプログラムや音楽CDでは、この考え方は理解しやすいであろう。情報財の生産に関しては、私と同様の考え方をする人が多い。しかし、テレビなどの物財やサービスについては理解に苦しむかもしれない。テレビの製造やサービスの提供のことを情報の複製と呼ぶなどばかっている、頭がおかしいのではないかというのが一般的な意見であろう。しかし、情報を物質・エネルギーのパターンであると考えれば少しも変ではない。テレビの製造とは、テレビの設計図という記号で示されたテレビの構造（パターン）という情報を物質に体化することによって、同じ構造を持ったテレビを作るという形で、テレビの構造という情報を複製しているのである。マニュアルに基づいたサービスの提供では、マニュアルという記号で示されたサービス行動のパターンという情報を実際のサービス行動に体化することによって、同じパターンのサービスを提供するという形で、サービス行動のパターンという情報を複製している（模倣している）のである。さらに言えば、明文化されたマニュアルがない職場でも、ある従業員のサービス行動のパターンの大部分は先輩・同僚のサービス行動のパターンの模倣から生まれ、また、同じパターンのサービス行動を繰り返しているということからすると、その職場やその従業員の頭の中に、明文化されていないマニュアルがあり、そのマニュアルが示すサービス行動のパターンという情報を複製しているということが分かる。

財・サービスの生産過程を「情報の創造」と「情報の複製」という2段階で把握し、それぞれに要する費用、労力の比較を歴史的に行うと、ある事実が判明する。それは、「情報の複製」に要する費用、労力が減少し続け、相対的に「情報の創造」に要する費用、労力が増大しているということである。

例えば、産業革命初期の代表的な産業である綿糸・綿織物工業では、「情報の創造過程」である綿糸・綿織物の設計（デザイン）に要する費用、労力は微々たるものであり、「情報の複製過程」である実際の製造過程に多くの費用、労力を費やしていた。このため、企業間の競争の中心は、「情報の複製過程」に要する費用、労力をどのようにして節約するのか（つまり、どのようにして生産性を向上させるのか）ということにあった。

ところが、現代のハイテク産業では、この関係が逆転している。例えば、「情報の創造過程」である医薬品の研究開発には莫大な費用、労力を要するが、「情報の複製過程」である医薬品の製造にはそれほど多くの費用、労力を要しない。このため、企業間の競争の中心は「情報の創造過程」に移る。つまり、どのような新製品を開発するのか、その開発費用をどのようにして節約するのかという競争になるのである。

このことは、一般に情報財と呼ばれているものでも同様である。古典的な情報財である本の場合には、「情報の創造過程」である本の執筆にはあまり費用を要しないが、「情報の複製過程」である本の印刷にはかなりの費用、労力を要する。原稿料は本の売り上げの10%前後というのが相場である（原稿料が安過ぎるのだという意見もあると思うが）。ところが、コンピュータソフト産業では、「情報の創造過程」であるソフトの開発には莫大な費用、労力を要するが、「情報の複製過程」であるパッケージソフト化にはそれほど多くの費用、労力を要しない。インターネットを通じたダウンロードという形で販売すれば、「情報の複製過程」であるハードディスク等へのコピーは消費者がやってくれる。

「情報の複製過程」に要する費用、労力の節約競争は、方向性がある程度定まった比較的安定的な競争である（もちろん、「情報の複製過程」に用いる機械・設備に関する画期的な技術革新により、「情報の複製過程」に要する費用が劇的に低下するケースもあるが、それほど多いケースではない）。そこでは、現場で働く社員の地道な努力の積み重ねが重要となり、彼らのやる気を維持させるために、年功序列型賃金体系などにより、比較的平等な処遇を行うことになる。

例えば、旧来型の製造業では、研究開発の段階（情報の創造過程）である程度の費用（固定費用）が必要であるが、それ以上に、実際の製造の段階（情報の複製過程）で大きな費用が必要である。工場をつくり（固定費用になる）、機械を買いそろえ（固定費用になる）、原材料を購入し（可変費用、限界費用になる）、多数の労働者を雇い入れ（可変費用、限界費用になる）なければならない。そのため、製品1個を追加して製造するための費用（限界費用）は、かなり大きなものになり、製品の研究開発費を回収した後は、大もうけというわけにはいかない。製造工程（情報の複製過程）を効率化して、い

かに費用を減らすかが競争の鍵になる。製造工程の機械化、分業化（細分化）、マニュアル化（記号化）、コンピュータ制御が不十分だと、工員の能力・勤勉さによって、生産量や製品の質にばらつきが生まれる（「情報の複製」に困難性・不正確性が残っているということ）。そのため、工員を正社員として雇い、やる気を引き出し、作業に熟練させる必要がある。また、生産規模を拡大し過ぎると、管理部門の肥大化、硬直化などによる非効率が生まれ、製品1個当たりの原価（平均総費用）が上昇する傾向があるので、企業には適正規模があり、独占とはならないことが多い。

ところが、現代のハイテク産業では、実際の製造の段階（情報の複製過程）よりも研究開発の段階（情報の創造過程）に多額の費用を要するようになってきたために、企業間の競争の中心は、新たな需要を喚起できるような新たな情報をどのようにして創造するのかということに移ってきた。新たな情報の創造による競争は、研究開発に成功するか否か、成功しても売れるか否か定かではない商品の開発競争であり、一種のギャンブルである。ギャンブルに挑ませる動機を与えるためには、莫大な成功報酬を与えることが必要である。

例えば、パソコンのソフトを製作・販売する場合、ソフトの開発過程では、多くの人々が長時間働く必要があり、巨額の開発費（固定費用になる）が必要である。しかし、ソフトの開発を終えた後は、製造のために必要な費用は、CD-ROM、マニュアル、箱等の製造費だけとなり、ソフトを1本追加して製造するための費用（限界費用）は、わずかなもので済む。さらに、インターネットを通してのダウンロードという形で販売すると、限界費用はゼロに近くなる。それを、何万円という値段で売るわけであるから、ソフトの開発費を回収した後は、大もうけということになる。生産量が増えれば増えるほど、製品1本当たりの原価（平均総費用）が低下することになり、生産規模が大きいほど有利となる（「収穫逡増」、「規模の経済」）ので、独占に向かう傾向がある。生産量の少ない企業では、コスト的に太刀打ちできないのである。

同じ製品・サービスを使う人が多くなるほど利便性が高くなるという「ネットワーク効果」や、ある製品・サービスの利用から、それを代替する製品・サービスの利用に切り替える際に必要な費用である「スイッチング・コスト」による「ロック・イン」の影響もある。例えば、マイクロソフトの **Word** は一番普及しているワープロソフトなので、他人に文章ファイルを渡すときには、その他人も **Word** を使っている可能性が高く、便利である。あまり使われていないワープロソフトだと、他人がそのワープロソフトを使っていない可能性が高く、不便である。その結果、みんなが **Word** を使うようになる。これが「ネットワーク効果」である。せつかく苦勞して **Word** の使い方を覚えたのに、他のワープロソフトに切り替えて一から使い方を覚えるのは面倒だから、**Word** を使い続けているという面もある。これが「スイッチング・コスト」による「ロック・イン」である。「ネットワーク効果」や「ロック・イン」は「標準規格化」（「4.記号化、機械化、標準規格化、細分化」参照）に伴う問題でもある。「ネットワーク効果」は「標準規格化」による「情

報の複製」の容易化であり、「ロック・イン」は「標準規格」に支配された状態である（「7. 人間と自然の「標準規格化」」参照）。なお、ブランド、経験曲線効果、サンクコスト、範囲の経済、補完資産の支配などの影響もあるが、話が繁雑になるので、説明は省略する。

「収穫逦増」、「ネットワーク効果」、「ロック・イン」などにより、成功者は独占による巨額の利益を得ることができる。この利益が成功報酬になる。企業内でも、新しい情報の創造を促進するために、成功報酬という餌で有能な社員を釣るということが行われるようになる。社員は、少数の人間にしかできない「情報の創造」（この場合、ソフトの開発、マニュアルの原稿書き）を担当する高賃金の正社員と、だれでもできる「情報の複製」（この場合、CD-ROM、マニュアル、箱等の生産）を担当する低賃金の非正規雇用者（あるいは、低賃金の開発途上国の企業に委託）の二つに分裂することになる。

以前は、取引費用（物流費用を含む）の大きさが独占可能な地域を限定する機能を果たしていた。遠方の地域や、外国に商品を売る場合には、輸送費が増加することはもちろんであるが、文化、生活習慣、言語、法制度の違いなどが取引費用を増加させ、商品の競争力を奪っていたのである。ところが、現在では、情報技術や交通機関の発達（情報の創造過程に要する費用の増加により、商品の単位重量当たりの価値が高くなり、物流費用の影響が小さくなったという面もある）が多くの商品の取引費用を劇的に低下させ、経済をグローバル化させ、世界的な規模での独占が可能となったのである。

つまり、企業同士でも、企業内でも、優勝劣敗、弱肉強食の熾烈な競争が行われることになるのである。

旧来型の産業でも大きな変化が起こりつつある。旧来型の産業で、情報技術の利用による製品のデジタル化と製造工程のコンピュータ制御（ファクトリーオートメーション等）が進むと、製造工程に熟練を要しなくなり（「情報の複製」のほとんどが容易化・正確化されるということ）、低賃金の非正規雇用者を利用したり、低賃金の開発途上国に工場を移転したりするようになる。「第5回 教育の経済効果（その3） 4.産業構造・技術水準との関係」で述べたように、デジタル技術が、機械の部品の形やその組み合わせといったような機械の構造（物質のパターンという情報）が果たしてきた役割をコンピュータ・プログラムなどのデジタル情報（つまり、デジタル化された記号）で代替することを可能にした。機械式のカメラからデジタルカメラへの変化、ビデオテープレコーダからハードディスクレコーダへの変化、アナログ方式のテレビからデジタル方式のテレビへの変化などである。機械的な構造を正確に複製することは難しく、労働者の熟練を要する。アナログで機械的な製品では人間の手による加工精度などが製品の性能に強く影響するため、その製造に熟練を要するのである。しかし、デジタル情報であれば、機械によって高速、正確に複製でき、熟練労働者は必要でなくなる。無論、デジタル情報を使った機械、製品であっても、すべてをデジタル情報化できず、機械的な構造が果たす役割は残っており、機械的な構造の複製には、労働者の熟練を要するのではないか

という問題が残る。しかし、デジタル情報を使った製品では、デジタル情報が製品の性能の決め手になり、人間は製品の性能の決め手にはならない部分を担当することが多く、作りが多少雑でも構わなくなるので、製品の製造に熟練を要することは少なくなり、その残された熟練もマニュアル化される。この結果、非正規雇用化や工場の海外移転が容易になる。

山田昌弘氏は『新平等社会』(P.245-247)で、このような経済社会構造の転換をロバート・ライシュにならって、ニューエコノミーと呼び、次のように指摘している。

1990年代後半、経済社会構造の大きな転換が起こったと考えられている。それは、物を作って売るという工業が主要な産業であった時代から、情報やサービス、知識、文化などを売ることが経済の主流になる時代への変化である。……ニューエコノミーでは、物作り主体のオールドエコノミーとは違って、商品やシステムのコピーが容易である。そこで生じるのが、コピーのもとを作る人と、コピーをする人+コピーを配る人への分化、マニュアルを作る人と、マニュアル通りに働く人への分化なのである。それは、将来が約束された中核的、専門的労働者と熟練が不要な使い捨て単純労働者へ、職業を分化させる。……企業は、若者を選別して、能力のあるものは中核社員、専門的社員として優遇、それ以外は、派遣、アルバイトなど身分保障や社会保険負担のない労働者で置き換えようとする。その結果、非正規雇用者が大量発生する。……一方で、旧来型の産業・職は、徐々に衰退局面に入る。工場はアジアに移転し、メーカーは工員を大量に採用しなくなる。IT化は、営業や事務、販売職の(熟練を前提とした)正社員を不要にする。

私の用語法では、「コピーのもとを作る人」と「マニュアルを作る人」が「情報の創造過程」を担当する人、「コピーをする人+コピーを配る人」と「マニュアル通りに働く人」が「情報の複製過程」を担当する人である。そして、上述のように「情報の複製過程」の価値低下は産業革命から始まっており、情報化の進展により、この傾向に拍車がかかってきたのである。この問題の存在に多くの人々が気付くようになったのは、情報産業においては、「情報の創造過程」と「情報の複製過程」の分離が誰の目にも明らかであり、また、「情報の複製」が容易だからである。

4. 記号化、機械化、標準規格化、細分化、高速化

「情報の複製」を容易化・高速化・正確化する方法には、「記号化」、「機械化」、「標準規格化」、「細分化」、「高速化」がある。「情報の複製」の容易化・高速化・正確化は、言葉・文字の使用という「記号化」と、分業という「細分化」から始まった。

分業を行うと、各自は、自分の担当する業務に専念することができるようになり、習熟が容易になるので、「情報の複製」の容易化・高速化・正確化が進む。分業を行うため

には、分業の対象となる活動全体をいくつかの業務に分け（「細分化」）、各員に割り当てなければならない。そして、その場の状況に応じて、各自の行動を相互調整し、結合しなければならない。各自の行動を相互調整し、結合するためには、他のメンバーの現在の行動の意味を理解し、将来の行動を予測できることが必要である。人類が、まだ言葉を使用していなかった時代には、分業に必要な技術を身につけるには、他人の行動パターンを見よう見まねで真似る（模倣する）ということが基本であったから、模倣によりメンバーの行動が共通化され（「標準規格化」）、他のメンバーの行動の意味を理解し、予測しやすくなる。もちろん、身振り、手振り、表情等により、各自の行動を相互調整するという事も行われていたであろうが、補助的なものに止まっていたであろう。

人類が言葉を使うようになって、技術の習得のために言葉を使うことはあまりなく、見よう見まねによる習得方法が主流であった。近代化（ここでは、産業革命と市民革命）以前の社会においては、技術は「記号化」（明文化、理論体系化）されておらず、暗黙知（ある活動を行う際に脳内で働いているが明示的に意識化されていない手続き的知識、潜在記憶）として、職人の頭の中にだけあった（あるいは、体に染みついていて）ため、技術を習得するためには、師匠や親方に弟子入りして、彼らの仕事の仕方を見て、まねをする（模倣する）以外に方法がなかったのである。この時代の職人の仕事は基本的に「情報の複製」に過ぎない。職人は、代々引き継がれてきた技術を使って、昔と同じような方法で、昔と同じような物を作っていたに過ぎなかったのである。職人には伝統に反したものを作る自由はなく、技術革新（情報の創造）はほとんど無かった（わずかにあった革新は伝統の再発見や再解釈という形式をとった）。ただし、職人の熟練の程度やその日の体調によって出来不出来があるので、完全に同じ物はなく、製品にばらつきがあった。つまり、「情報の複製」が不正確であった。

ウォルター・J・オング『声の文化と文字の文化』（P.94-95）で次のように述べている。なお、「声の文化」とは文字を書くことを知らない文化である（「第4回教育の経済効果（その2） 3.学校における「社会化」の隠された実体」参照）。

声の文化は、そのすべての知識を、人間的な生活世界 *lifeworld* に多少とも密接に関係づけるようなしかたで概念化し、ことばにしなければならない。つまり、外的で客観的な世界を、もっと直截に、身近に知っている人間同士の相互関係になぞらえて概念化し、ことばにしなければならない。〔それに対し〕手書き文字の文化（書く文化）や、さらには活字文化（印刷文化）は、そうした人間的な関係から距離をおき、ある意味では、そうした人間的なものの性質まで変えてしまうことができる。……

声の文化には、商売のためのハウ・トゥー・マニュアル〔手引き〕にあたるようなものがまったくない（このような手引きは、手書き文字の文化においてさえ実際にはきわめてまれであり、あってもつねに大まかなものである。実際にそうしたものがあらわれはじめるのは、印刷の文化がかなり内面化されてからのことである……）。〔た

たとえば] 商売のやりかたなどは徒弟奉公で学ばれた（今日の高度技術文明においてもなお、おおかたはそんなふうにして学ばれている）。つまり、見習い〔観察と実践〕で学ばれるのであって、ことばによる説明などは最小限にしかあたえられないのである。

「第 8 回能力の個人差 4.知能のモジュール性と認知的流動性」で、スティーヴン・ミズンの『心の先史時代』に依拠して述べたように、言語は社会関係（人間関係）を処理する社会的知能から生まれたものであり、技術を担当する技術的知能や博物的知能の言語化は遅れていたのである。そのため、文字の使用が始まって、長い間、学問による「記号化」は専ら社会関係を対象にし、一部が自然現象に向かったのみであり、技術は学問の対象であるとは考えらず、「記号化」されていなかった。技術は知識ではなかったのである。P・F・ドラッカーは『ポスト資本主義社会』（P.61-80）で次のように述べている。

長い間、……西洋においては……知識は「行為能力」は意味していなかった。すなわち知識は、効用を意味してはいなかった。……効用は「技能」だった。ギリシャ語に言う「テクネー」だった。……「テクネー」は、その適用の範囲がつねに特定の範囲に限定され、一般法則を伴わなかった。……「テクネー」を学ぶ唯一の方法は、徒弟となり、経験を積むことだった。「テクネー」は、言葉や文字では説明できなかった。……技能を持つ者は、その秘密を守ることを誓わされた。そもそも技能は、親方のもとへ徒弟に入らない者には手に入らなかった。それは手本によって示されるべきものだった。……

しかし 1700 年以降、しかもわずか 50 年という短い年月の間に、「テクノロジー（technology 技術）」が発明された。……世界最初の工学校であるフランスのエコール・デ・ポン・ゼ・ショセが設立されたのが 1747 年、……1794 年には、世界最初の工科大学として、フランスにエコール・ポリテクニクが設立され、エンジニア（技師）なる新しい職種が生まれた。……技能から技術への劇的な変化に関する偉大な記録……が、1751 年から 1772 年にかけて、ドゥニー・ディドロ……とジャン・ダランベール……によって編纂された『百科全書』である。この書は、技能に関するあらゆる知識を組織的、体系的にまとめあげ、徒弟でなくとも「技術者」になれるようにするものだった。……『百科全書』の思想は、道具、工程、製品などの物質世界における成果は、知識の体系的分析と、その体系的、目的的应用によって生み出されるというものだった。『百科全書』はまた、一つの技能において成果をうみだすことのできる原理は、他の技能においても成果を生み出せると説いた。……技術学校や『百科全書』は、経験を知識に、徒弟制度を教科書に、秘伝を方法論に、作業を知識に置き換えた。これこそ、やがてわれわれが「産業革命」と呼ぶことになるもの、すなわち、技術によって引き起こされた、世界的規模における社会と文明の転換の本質だった。

……

1881年、一人のアメリカ人、フレデリック・ウィンスロー・テイラー……が「仕事」の研究、「仕事」の分析、「仕事」のエンジニアリングに知識を適用した。……彼は、分析によってかく行うべしと示された方法に従って仕事をする者は誰でも、「第一級の工員」として、「第一級の賃金」、すなわち長年の徒弟時代を経験した熟練労働者と同額、あるいはそれ以上の賃金を得るに値するようになれるとした。……テイラーの時代のアメリカで……労働組合に入れる者は、組合員の子弟や縁者であり、5年から7年の徒弟時代を経験しなければならなかった。体系的な訓練や、仕事の研究はなかった。何ごととも書き写すことは許されなかった。青写真や設計図すらなかった。組合員は秘密を守ることを誓わされ、仕事について非組合員と話すことを禁じられた。仕事は研究され、分析され、その各々が適切な方法、タイミング、道具による一連の単純反復動作に分解されるというテイラーの考えは、まさに彼ら労働組合に対する正面攻撃だった。……熟練であれ非熟練であれ、すべての肉体的な仕事は知識を適用することに分析され、組織されるというテイラーの原則は、彼の同時代人にとって、途方もない考えだった。技能には秘伝があるという考えこそ、長い間、受け入れられてきたものだった。……

テイラーが知識を仕事に適用してから数年後には、生産性の伸びは、年率3.5パーセントないし4パーセントへと増加した。……その結果、あらゆる先進国において、テイラー以降今日にいたるまでの間に、生産性は約50倍に増加した。そして、この前例のない生産性の伸びが、先進国における生活水準と「生活の質」の向上をもたらした。

また、アーノルド・パーシーは『世界文明における技術の千年史』(P.162-166)で、17世紀のヨーロッパでは、物事の成り行きを機械に置き換えて考える習慣が広がっていたことを指摘している。例えば、時計は全宇宙を支配する機械的な秩序を示す一つの表現形式だと考えられたり(惑星の動きを時計のような機械に置き換えて考えるなど)、心臓をポンプとみなして人体が研究されたりした。そして、火縄銃、測量機器、紡ぎ車などを設計し直したり、それを操作する人間の動作を速めたりする目的のために、操作する人間の腕や指の動きに対する分析が加えられていった。例えば、オランダ独立戦争(1568~1648)当時のオランダの陸軍総司令官であったモーリッツは、火縄銃に装填し、着火するのに必要な一連の動作を研究し、その動作を42の段階に細分し、それぞれを図に描き、特殊な指令用語を当てて、号令を発すると兵士が反射的に一斉に動くように訓練することを可能にした。その結果、敵に壊滅的な打撃を与える一斉射撃ができるようになった。18世紀には、紡ぎ車を繰る紡績工が、軽く撚りをかけた綿糸を工程に送り込む腕と指の動きが分析され、その動きを機械化するさまざまな方法が試みられ、ジェームス・ハーグリーブスやリチャード・アークライトの紡績機の発明につながっていった。腕と指が生み出す複雑な動きを分析してみると、多くの単純な動作から成り立っており、

その動作を機械に置き換えられることが分かったのである。

産業革命により、職人の行ってきた仕事の多くが機械によって代替されるようになってきた。職人の仕事のパターンを単純な動作パターンに細かく分けて（「細分化」）、それらを機械の動作パターンに置き換え、製品の製造という「情報の複製」を容易化・高速化・正確化した、つまり、製品の製造に要する労力を節約し、出来不出来のばらつきを少なくしたのである。その結果、生産性が向上した。これが、「機械化」による「情報の複製」の容易化・高速化・正確化の始まりである。なお、アーノルド・パーシーが指摘しているように、「機械化」するためには「細分化」する必要がある。

情報技術の利用により機械がデジタル化される前は、機械の動作パターンは、部品の形や部品の組み合わせといったような機械の構造と人間が行う機械の操作によって担われていたために、製造機械の生産や製造機械を使った製品の生産には、機械の構造の正確な複製と正確な機械の操作のための労働者の熟練を要し、「情報の複製」の容易化・高速化・正確化は不十分であった。機械がデジタル化されると、機械の動作パターンと機械の操作の多くの部分をコンピュータ・プログラムなどのデジタル情報が担う（コンピュータ制御等）ようになる。デジタル情報は機械により高速、正確に複製できるので、「情報の複製」の容易化・高速化・正確化は加速される。つまり、情報技術によって「機械化」と「記号化」が結合して、機械が「ロボット化」され、「情報の複製」の容易化・高速化・正確化の完成形である「ロボットがロボットを作る世界」へと近づくのである。

また、市民革命の後、専門的技術者集団による技術の独占がうち破られ、技術が「記号化」され始め、技術を学校で教えるようになってくると、技術の習得が容易になり始めた。「記号化」による技術分野の「情報の複製」の容易化・高速化・正確化の始まりである。

「記号化」には、「具体的記号化」と「抽象的記号化」の2種類がある。それを覚えて、実行に移すことが容易な具体的な業務マニュアルを作成することが「具体的記号化」であり、技術を抽象的な「理論体系」（工学、農学、医学、法学、経営学等）にすることが「抽象的記号化」である。

「技能から技術への劇的な変化」は「抽象的記号化」の方向に向かった。「理論体系」は抽象化の度合いを高めてゆき、理論に理論が積み重ねられて複雑化していった。また、「理論体系」は分野別に分かれ、専門化していった（「細分化」）。その結果、「理論体系」を学び、使うことができる者はその分野の専門家に限られるようになっていった。他方、理論体系は、工場で働く工員の具体的な作業への関心を失っていった。また、工場の機械は操作に熟練が必要で、トラブルが多発するという不完全なものであった。その結果、工員の世界に「秘伝」という名の暗黙知が残り、徒弟修業による熟練が必要とされた。つまり、技術の「記号化」と作業の「機械化」は不完全であり、産業革命前の職人的な要素が残されていたのである。

工場で働く工員の具体的な作業の記号化の始まりは、「仕事は研究され、分析され、そ

の各々が適切な方法、タイミング、道具による一連の単純反復動作に分解される」というテイラーの「科学的管理法」である。「科学的管理法」による「分析によってかく行うべしと示された方法」を記号化、つまり、マニュアル化したものが「マクドナルド化」である。「マクドナルド化」によって「具体的記号化」が始まったのである。

以後、仕事の仕方を抽象的な「理論体系」にした、つまり、「抽象的記号化」したものを「抽象的マニュアル」と、仕事の仕方を具体的なマニュアルにした、つまり、「具体的記号化」したものを「具体的マニュアル」と、それぞれ呼んで区別することにする。

橋本毅彦氏は『〈標準〉の哲学』で、19世紀半ばに、アメリカで、工業社会を形作る上で極めて重要な技術革新が起こったと指摘している。それは、「標準規格化」された交換可能な部品による機械の大量生産の実用化である。このアメリカにおける技術革新前は、機械は大量生産されるものではなく、職人が一品ごとに手作りするものであり、同じタイプの機械であっても、一品ごとに微妙な違いがあった。つまり、「情報の複製」が不完全であった。また、機械を作る職人には高度な熟練が必要とされていた。つまり、「情報の複製」が容易ではなかった。しかし、機械を「標準規格化」された部品で組み立てるようにすれば、同じタイプの機械であれば、ほとんど違いがなくなり、「情報の複製」が完全化される。また、それぞれの部品が単純なものとなり、それらの部品を作ったり、完成品を組み立てたりするのに要する熟練の程度が低くなるので、「情報の複製」が容易化される。その結果、フォード社でのT型フォードの生産(1908年)に典型的に見られるような、未熟練の労働者がベルトコンベアで流れ作業を行い、製品を大量生産するというシステム(フォード・システム)が生まれ、大衆消費社会へとつながっていった。「細分化」、「標準規格化」によって「情報の複製」の容易化・高速化・正確化が大幅に促進されたのである。

分業の説明でも述べたように、活動を「細分化」すると、「細分化」された個々の行動を相互調整し、結合するために、個々の行動を「標準規格化」することが必要になる。個々の行動が「標準規格化」されていないと、相互調整に手間取り、失敗する場合もある。それと同じように、機械を部品に「細分化」すると、それらの部品を組み合わせ、完成品を組み立てるために、個々の部品を「規格化」する必要がある。部品を「標準規格化」していないと、部品同士がうまくかみ合わない。つまり、「細分化」は「標準規格化」を伴うのである。

産業革命以降、経済活動において、そのスピードを上げることが好ましいことであるという価値観が浸透し始め、その他の様々な活動にも波及していった。そして、この「高速化」の傾向は加速してきた。農業では、作物の自然の成長を待たなければならないため、スピードを上げてあまり利益が増えないのに対して、工業では「情報の複製」のスピードを上げることが利益の増加に繋がるので、「高速化」は良いことであるという価値観(時は金なり)が浸透したと思われる。

サービス業やオフィスワークの分野では、「情報の複製」の容易化・高速化・正確化が

遅れていた。仕事の仕方を覚えるには、先輩や同僚の仕事の仕方を見て、まねをする（模倣する）という方法が主流であった。つまり、近代化前の職人と同じである。そのため、仕事を覚えるには時間がかかり、また、模倣も不完全なものが多かった。つまり、「情報の複製」は容易ではなく、不完全だったのである。

サービス業やオフィスワークの分野における「情報の複製」の容易化・高速化・正確化は、組織の官僚制化から始まった。官僚制化された組織では、各自の役割分担の内容、すなわち、職務分掌と行動基準が規則によって定められている。つまり、規則によって、職務が「細分化」され、「標準規格化」されている。組織の構成員は、自分に命ぜられた職務の範囲内で、規則という「抽象的マニュアル」（場合によっては「具体的マニュアル」）にしたがって仕事を行う。ただし、規則は業務の全てをカバーしきれていないため、また、規則は抽象性が高いため、実際の業務に適用するには規則に書かれていないことを解釈という形で補う必要がある、つまり、裁量の余地がある。この結果、職務の「標準規格化」が不完全であり、「情報の複製」には不完全性が残る。

ファストフード店などでは、効率化を進める（情報の複製を容易化・高速化・正確化して、生産性を向上させる）ために、業務の多くを「具体的マニュアル」化して、解釈の余地をほとんどなくして、解釈能力に左右されないようにし、つまり、業務の「標準規格化」を推し進め、また、業務を「細分化」することで、容易に業務に習熟できるようにして、ほとんど誰でも仕事ができるように、つまり、低賃金の非正規雇用者でも担当できるようにした。

「記号化」のために「細分化」する必要性は必ずしもないが、「具体的記号化」に「細分化」が伴わないと、膨大な量の「具体的マニュアル」になってしまい、覚えることが困難なので、実用上、「具体的記号化」には「細分化」を伴う。また、欧米の専門分化的、要素還元主義（複雑な事象をいくつかの単純な要素に分割し、それらの単純な要素を分析し、理解することによって、元の複雑な事象が理解できるという考え方）的な科学・技術では、「抽象的記号化」に「細分化」が伴っている。

「記号化」は「標準規格化」を導く。「記号」は「標準規格」の一種である。自然のパターンは複雑で、連続的なものである。例えば、山、平地、谷は自然に存在するものではなく、地表の凹凸という複雑で連続的な変化を、人間が山、平地、谷というカテゴリー、つまり、「記号＝標準規格」に従って分類したから存在しているのである。平地の中に周囲より高く盛り上がった部分がある場合、それを山と呼ぶかどうかというのは恣意的な区別で、日本で一番低い山はどこかということが話題になったりする。人間の脳などの神経系の構造が遺伝的に制約されているため、人間が行う自然のパターンの「記号化＝標準規格化」には共通部分もある（例えば、色の基本的な分類方法は文化が違ってても共通である）が、言語を作りだした文化による恣意的な「記号化＝標準規格化」も多く、文化が違えば「標準規格」が違う（例えば、英語には兄と弟、姉と妹の区別がない）ということも多い。言

語による思考は、言語（その背後にある文化）という「標準規格」によって制約され、支配されているのである。

コンピュータにより代替できるサービス業務やオフィスワークが増えてきている。職員の情報処理パターンをコンピュータの情報処理パターンに置き換え、情報処理、つまり、「情報の複製」を容易化・高速化・正確化しているのである。

5. 「情報の複製過程」を価値あるものと思わせてきた仕組みの破壊

私は以前、「外在化した情報に支配される人間」で、「記号化」と「機械化」によって、人間が自分たちの外に作りだした記号や機械という「外在化した情報」によって逆に支配され、主体性を奪われている、つまり、自分たちで作ったものに自分たちが支配されているという疎外の状況にあることを指摘した。この問題を、仕事という面での具体例を通して見ていく。

「4. 記号化、機械化、標準規格化、細分化、高速化」で述べたように、産業革命前は、技術を習得するには、師匠や親方に弟子入りして、彼らの仕事の仕方を見て、まねをする（模倣する）以外に方法がなかったため、技術を習得すること自体に価値があり、また、専門技術者集団（例：中世ヨーロッパにおけるギルド）が技術を独占していた結果、技術を習得した人には希少価値があるため、職人は誇りを持つことができた。

産業革命による「機械化」によって、製造業の分野で、「情報の複製過程」を価値あるものと思わせてきた仕組みの破壊が始まった。ただし、近年までは、「機械化」は不完全なものであり、技術の「具体的記号化」もほとんど進んでいなかったため、機械の操作（あるいは、機械のトラブルへの対処）と技術の習得にはある程度の努力（熟練）が必要とされ、製造業の分野で「情報の複製過程」を担当する者（工員）の価値はある程度尊重されていた。しかし、工業技術が完成期を迎えて（森谷正規著『文明の技術史観』参照）トラブルの発生が減少し、情報技術の進歩により自動化が進んで機械の操作が容易になって、「機械化」が完全なものに近づき、また、「具体的記号化」が進み、その結果、製造業の海外への移転が進展して、「情報の複製過程」の価値が一挙に低落してしまった。

サービス業やオフィスワークの分野では、「記号化」、「標準規格化」、「機械化」が遅れ、仕事の仕方を覚えるには、先輩や同僚の仕事の仕方を見て、まねをする（模倣する）という方法が主流であったため、仕事を覚えるには時間がかかり、熟練するにつれ、迅速かつ正確に仕事ができるようになる、つまり、「情報の複製」が高速化・完全化され、生産性が向上し、その職場のベテランとしての誇りを持つことができた。しかし、ベテランといえども、彼の行っている仕事は基本的に他の人の仕事の仕方のまねをし、それを繰り返している、つまり、「情報の複製」に過ぎない。ベテランも、職場の先輩が行ってきた方法（仕事のパターン）と同じような方法で仕事をしている場合がほとんどだからである。つまり、明文化されていないマニュアルを苦労して覚え、それに従って働いて

いる（明文化されていないマニュアルに支配されている）だけなのに、自分の判断で仕事をしている、つまり、主体性があると誤解し（幻想を抱き）、誇りを抱いていたのである。最近、主体性のない「マニュアル人間」が増えてきていると批判する人がいるが、「マニュアル人間」は明文化されていないマニュアルを察知する能力に劣るだけである。批判している人は、明文化されていないマニュアルを察知する能力に長けているだけであり、主体性のない「マニュアル人間」であるという点では同じである。

官僚化した組織では、規則で業務の全てをカバーすることができないため、また、規則は抽象性が高いため、実際の業務に適用するには規則に書かれていないことを解釈という形で補う必要がある、つまり、裁量の余地がある。この裁量の余地は組織内での職位が高いほど、大きい。つまり、職位の高い者が、抽象的な規則を解釈して、より具体化された規則を下位の職員に示したり、職務命令をしたりして、したがわせることが多いのである。その結果、下位の職員になるほど、マニュアルに解釈の余地が少なくなり、マニュアル通りに働かされている（マニュアルに支配されている）という意識が強くなり、仕事に対する誇りを奪われる。なお、上位の職員では裁量の余地が大きいといっても、前例にしたがうことが原則となっているので、実質的には、裁量の余地が大きいとは言えない。前例にしたがうというのは、仕事の仕方の伝統的な覚え方である「先輩の仕事の仕方を見て、まねをする」、つまり、慣行・慣習にしたがうという方法を意識化したものであると言える。

ファストフード店などで、オフィスワークやサービス業の分野で効率化を進めるために、業務の「具体的マニュアル」が作られ、「具体的記号化」が進められると、仕事の仕方を覚えることが容易になるために、ベテランの希少価値が薄らぎ、また、マニュアル通りに働かされている（マニュアルに支配されている）という自覚も持つようになり、主体性があるという幻想から目覚め、仕事に対する誇りを奪われる。

また、コンピュータ（「機械化」の一種）により代替できるサービス業務やオフィスワークが増えてきている。つまり、業務の「具体記号化」と「機械化」は、サービス業とオフィスワークの分野で、「情報の複製過程」を価値あるものと思わせてきた仕組みを破壊しつつあるのである。

業務の「記号化」が行われていなかった時代には、「情報の複製」を容易化・高速化・正確化するために、自ら進んで、努力までして、熟練という形で自分を「標準規格にしたがって、ロボットのように高速、正確に定型的な仕事ができる存在」（以下「擬似ロボット」と呼ぶ）に改造していたが、業務の「記号化」が行われると、マニュアルという記号に強制されて、嫌々ながら「擬似ロボット」に改造されるようになる。同じように「擬似ロボット」になっても、他人の行動パターンの模倣によって「擬似ロボット」になった場合には喜びを感じるが、模倣の方法が記された記号に強制されて「擬似ロボット」になった場合には反発を感じるということである。これは、人間には、他人の行動パターンを観察して模倣することによって学習するという本能があるが、行動パターン

を記した文字にしたがって、その行動パターンを模倣する（つまり、「抽象的マニュアル」である本から学ぶ、あるいは、「具体的マニュアル」にしたがう）という本能がないからだろう。

進化心理学の指摘によれば、人間の遺伝子構造は狩猟採取生活に適応するようにできている。文字を持たなかった狩猟採取時代においては、狩猟、採取、育児などがうまい人の行動パターンを観察して模倣することが狩猟、採取、育児などに上達する、さらには生き残りのための最高の戦略であったので、何らかの作業がうまくできる人の行動パターンを観察して模倣することに喜びを感じる本能が生まれたのだと思われる。「才能の差異を増幅する本能」（「第8回 能力の個人差 11.才能の差異を増幅する本能」参照）にしたがって、自分が得意な分野で優れた能力を持っている人を尊敬し、その人の行動パターンを模倣する傾向があるようである。多くの人々が何らかの作業がうまくできる人の行動パターンを観察して模倣することを繰り返すと、人々の行動パターンが共通化され、何らかの作業をうまくするための慣行（ならわし）や慣習が存在するよう見えだし（規範性の弱いものが「慣行（ならわし）」、規範性の強いものが「慣習」という使い分けをしている、以下同じ）、周りの人々の行動パターンを模倣することによって、慣行・慣習にしたがうようになる。これが慣行・慣習の起源の一つであろう（タブーのように宗教・文化的あるいは遺伝的起源を持ち、意識化されているが反発されない慣習もある）。尊敬できる人の行動パターンを模倣したり、周りの人々の行動パターンを模倣したりしている状況下では、模倣している人は、自分を向上させるために、模倣していると思っているだけであり、尊敬できる人や慣行・慣習にしたがっている（支配され、服従している）という自覚がない。しかし、慣行・慣習の存在が明瞭に意識化されたり、慣行・慣習を明文化して規則やマニュアルにしたりすると、その内容が変わらなくても、人々は規則、マニュアルにしたがわされている（支配され、服従している）という自覚を持ち、そのことに反発するようになる。このような傾向は、「声の文化」の「具体的思考」を行う人びとに強く見られる傾向であり、「文字の文化」の「抽象的思考」能力が高まるにつれ、このような傾向は薄らいでいく（「第4回 教育の経済効果（その2） 3. 学校における「社会化」の隠された実体」、「第9回 教育と格差の再生産 4. 環境の違い→努力差→教育格差」参照）。なお、この問題については、「7.人間と自然の「標準規格化」」でも論じる。

仕事の仕方という情報の複製が困難であった時代は、仕事の仕方を覚えて、誤りなく複製できるようになる（つまり、熟練する）こと自体に価値があった。熟練することによって、迅速性と予測可能性（この人が作った物ならば大丈夫ということ）を実現できたからである。中根千枝氏は『タテ社会の力学』（P.145-146）で、「日本社会においては、全体のスケールから見ると、底辺に近く、しがたない商売と世間から思われているような仕事に従事している人々でも、近寄ってみると、なんと誇り高い気持でいるかと驚くほどである。たとえば、お祭りのときの小さな屋台店で食べ物を作って売っているような人

でも、「わしはこの道 8 年もやっているんですぜ。そのあたりの連中とは出来が違いますよ」などといった自負をもっている。どんな仕事をしている人でも、ちょっと話をすれば、こうした気持ちをもっていることがわかる」と指摘しているが、これはどのような仕事であっても、それがマニュアル化されていなければ、熟練するには長年の努力が必要であり、熟練していないとまともな物を作れない（情報の複製に誤りが多く、どのような物ができるか予測不可能になる）ので、熟練していることに自負を持つことができたからである。また、企業に正社員として就職した者は、仕事の仕方を覚えるにつれ、生産性が向上し、処遇が向上した。仕事があまり複雑でなければ、仕事の仕方を覚える能力の個人差はあまり大きくないので、年数をかけて努力すれば何とかなる人が多い。その結果、仕事の仕方を覚えるという努力、その代理指標としての年功が評価されていたのである。また、その企業の仕事の仕方を覚えている者が他にはいないことから、代わりがきかないという意味で固有の価値のある存在である。

これは、日本人に根強く存在している「能力平等観」と「努力主義」（「第 8 回 能力の個人差 1. タブー視される「能力の個人差」参照）にマッチしている状態であり、それ故に、日本は高度成長できたのである。高度成長期に日本が行ってきたことは基本的には欧米の物まね、つまり、「情報の複製」だったので、努力すれば何とかあったという面も大きい。

ところが、仕事が「具体的記号化」、「分業化」、「標準規格化」、「細分化」され、習得が容易になると、仕事の仕方を覚える（熟練する）ことが自体の価値が低下する。ファストフード店で「具体的マニュアル」にしたがって食べ物を作っている人は「わしはこの道 8 年もやっているんですぜ。そのあたりの連中とは出来が違いますよ」などといった自負を持つことはできない。「具体的マニュアル」にしたがえば、ほとんどの人が短時間で完璧な物を作ることができるようになる（情報の複製に誤りがなく、どのような物ができるか予測可能になる）からである。企業は、「具体的マニュアル」化された定型的業務のために高コストの正社員を多数抱える必要がなくなり、非正規雇用で労働者を使い捨てるようになる。非正規雇用者はいくらでも代わりがきくという意味で固有の価値を否定された存在であり、熟練の必要がないという意味で努力を評価されることのない存在である。山田昌弘氏は『新平等社会』（P.98-103）で、次のように指摘している。

ニューエコノミーは、生産性という意味で労働者を二極化させる。……

専門的中核労働者は、創造力（新しい工夫、いままでにない組み合わせを作る能力）、想像力（人が何を欲しがっている、してもらいたいかを察知する能力）、情報スキル（情報を加工し、システムを作る能力）、美的センス（人々に欲しいと思わせるような「クール」な商品を作る能力）が必要な仕事に就き、高い生産性を発揮する。……

一方で、定型的作業労働者は、スキルアップが必要でない仕事（配送、組み立て、配膳、仕分け、ティッシュ配りなど）、マニュアル通りに働けばよい仕事（ファストフ

ード・コンビニなどでの接客、データ打ち込みなど)に就き、生産性の大きな上昇は期待できない。確かに、ティッシュ配りの達人と呼ばれる人はいるが、それでも、生産性は普通に配る人の2倍もいかないであろう。彼女に2倍以上の時給を払う必要はないのだ。

工場労働者は、オートメーション化により、熟練の必要のない定型労働が増える。……事務労働は、パソコンの発達により、派遣労働で置き換えることが可能になり、営業もインターネット取引などの発達で人手が要らなくなる……販売は、POSシステムの発達やマニュアル化……によって、大きな熟練の必要のない労働に置き換えられる。……

ニューエコノミーが残酷なのは、高スキルが必要な職は増えてはいるが、多数にはならない、つまり、全員が高スキルが必要な職に就けることはないということである。……

一方で、昇進の必要がない低スキル職への需要は、ますます大きくなる。……

スキルアップの必要のない職は、いくらでも代わりがいる職でもある。自分という存在は、単に労働力に還元され、自分が必要とされるという実感がわくことはない。

つまり、会社や市場から「個人として」、必要とされる人と必要とされない人に分けられる。……

ただ、……ニューエコノミーが浸透したといっても、まだ、工業社会的部分が多く残っている。……公務員やモノ造りの工業、一般職などの分野で、低スキルから始め「誰でも」一定の努力をすれば、比較的高い仕事能力の地位に移行できる職はまだ多い。……だからといって、このような職に望めば誰でも就けるわけではないし、公務員削減などによって、そのポストは少なくなる傾向にある。

「専門的中核労働者は、創造力……、想像力……、情報スキル……、美的センス……が必要な仕事に就き」という時代が来るのはまだ先の話であろう。現時点における「専門的中核労働者」の多くは、不完全で複雑難解な「抽象的マニュアル」を具体的な現実に適用する仕事を行っている。不完全で複雑難解な「抽象的マニュアル」を覚え、現実に適用するには、一定程度以上の能力、教育、経験が必要で、誰でもできることではない(その点で「低スキルから始め「誰でも」一定の努力をすれば、比較的高い仕事能力の地位に移行できる職」とは異なる)ので、彼・彼女らは「専門的中核労働者」等であることができるのであって、創造力、想像力、情報スキル、美的センスがあるためではない。不完全で複雑難解な「抽象的なマニュアル」を完全に単純明快な「具体的マニュアル」に変えることができれば、彼・彼女らは不要になる(「6.高度知識労働者の一時の栄華」参照)。その時に、本物の「専門的中核労働者」等として残ることができるのは、「徹底的に勉強」しても身につけることができない、一流の創造力、想像力、情報スキル、美的センスを持つ少数の者「高度創造的労働者」だけである。

「低スキルから始め「誰でも」一定の努力をすれば、比較的高い仕事能力の地位に移行できる職」が残っているのは、それが工業社会的部分だからではない。単に、「具体的マニュアル」化とデジタル化が進んでいない分野だというだけである。いわゆる「ニューエコノミー」化が進むのは、いわゆる「ポスト工業社会」的部分、つまり、情報産業や新しいサービス産業だけではない。工業化、産業化とは「情報の複製」の容易化・高速化・正確化であり、その究極の姿が「ニューエコノミー」や「情報社会」と呼ばれているものである。どのような産業分野においても、マニュアル化とデジタル化が進み、「情報の創造過程」と「情報の複製過程」が明確に分離されると、「ニューエコノミー」化、「情報社会」化する。工業も農林水産業も公務員の仕事もマニュアル化とデジタル化が進めば、「ニューエコノミー」、「情報社会」になる。なお、公務員の仕事が「低スキルから始め「誰でも」一定の努力をすれば、比較的高い仕事能力の地位に移行できる職」であるというのは偏見である。公務員の仕事には、複雑難解、不完全な「抽象的マニュアル」を具体的な現実に適用するため、一定程度以上の能力、教育、経験が必要で、誰でもできることではない仕事もある。ただし、創造力、想像力、情報スキル、美的センスを使って仕事をしている公務員はほとんどいないだろうが。

「具体的記号化」された定型的業務は、経済のグローバル化に伴い、賃金の安い発展途上国に移っていく。国内に残された定型的業務も賃金引き下げの圧力にさらされる。仕事を発展途上国へ移せるようになったのは、仕事が「具体的記号化」され、習得が容易になったからである。経済のグローバル化を妨げる障壁（輸送費、通信費、関税、技術移転の困難性、文化・生活習慣・言語・法制度の違いなど）を低くするために、「記号化」「標準規格化」が果たしている役割は大きい。技術が「記号化」されると移転が容易になり、文化・生活習慣・言語・法制度が「標準規格化」されると取引が容易になるのである。

経済のグローバル化を妨げる障壁が無くなると、新古典派経済学における要素価格均等化定理（説明が長くなるので、詳しい説明は省略する）が働くようになり、同一の能力を持つ労働者の賃金は世界的に同一になる、つまり、先進国では賃金が低下し、発展途上国では賃金が上昇する。発展途上国の低賃金の労働者との競争にさらされている分野で、先進国の労働者の賃金が低下し、その賃金の低下が、発展途上国との競争にさらされない分野の労働者の賃金にも影響を与えるのである。現実には、経済のグローバル化に対する障壁が完全に無くなることは無いが、障壁が低くなれば、同一能力を持つ労働者間の賃金格差は縮小する。その結果、先進国の国民は貧しくなるが、発展途上国の国民は豊かになる。なお、発展途上国が国際経済に参加することにより、非熟練労働者が大幅に増加して、熟練労働者・知的労働者が相対的に希少になり、非熟練労働者と熟練労働者・知的労働者の賃金格差が拡大するという面もある。

また、「具体的記号化」された定型的業務は、どんどん「機械化」、そして、「ロボット化」される。海外移転するか、「機械化」するかは、技術的可能性の問題もあるが、コス

トの問題も大きい。今は、海外移転した方がコストがかからない分野が多いので、海外移転が進んでいるが、要素価格均等化定理が働いて発展途上国の賃金が上昇すると、「機械化」が進むようになる。

つまり、「昇進の必要がない低スキル職への需要は、ますます大きくなる」というのは過渡期の一時的な現象に過ぎないのである。将来、ロボットがロボットと製品を作るようになり、非正規雇用者すら、ほとんど必要とされない社会、多数の人々が失業し、社会保障に頼って生活する社会がやってくる。ロボットと製品の設計などの「情報の創造過程」を担当する「少数のエリートが国富を稼ぎ出し、多くの大衆は、その国富を消費し、そこそこ楽しく「歌ったり踊ったり」して暮らすことで、内需を拡大してくればよい」（三浦展著『下流社会』P.265）という社会である。この社会では、「情報の創造過程」を担当する能力のない人間は、生産せず消費するだけの人間になってしまうのである。養老孟司氏は『バカの壁』（P.177-178）で次のように指摘している。

我々は今日まで一生懸命、単調な社会を延々と作ってきた。例えば、かつては働かなくても食える状態に近づきたいという気持ちが共通の原動力となって、これだけ生活が便利になった。以前なら、十軒で耕していた田んぼを今は一軒でやっている。そうすると、九家族は遊んでいるわけです。……機械化等の合理化によって、一家族が働いただけで、かつてなら十家族が働いていただけの……収穫が出てしまう。……では、その遊んだ分は一体どうするのかということを実際に考えてきたか。合理化、合理化という方向で進んできて、今もその動きは継続している。が、それだけ仕事を合理化すれば、当然、人間が余ってくるようになる。この余ってきたやつは働かないでいいのか。仮にその分は働かなくてもいいという答えを出すのなら、今度は働かない人は何をするかということの答えを用意しなければいけない。……そのへんのことをまったく考えないまま、よく言えば無邪気に、悪く言えば無責任にここまで来た。にもかかわらず、いまだに合理化と言っている人の気が知れない。

「合理化」とは「情報の複製」の容易化・高速化・正確化による生産力の増強である。そして、「情報の複製」を容易化・高速化・正確化するために、「標準規格化」し、「単調な社会を延々と作ってきた」。その結果、「働かない人は何をするかということの答え」を見つけなければならなくなってしまうのである。「そこそこ楽しく「歌ったり踊ったり」して暮らす」だけで良いのであろうか。彼・彼女らに社会保障で生活資金を提供することに、「情報の創造過程」を担当し、税負担をしている人々が納得するであろうか。人間の本能である「互惠性」（「9.互惠性（互酬性）」参照）に反するために、納得することはあり得ないであろう。

「情報の創造過程」を担当する成功者も、その成功が長続きする保証はない。どのような工夫をした商品が売れるのか、どのような美的センスの商品が売れるのか、人々が

何を欲しがるか、移ろいゆくものである。そのため、時代の波に乗り遅れ、いつ敗者（失業者）に転落しても不思議ではないという不安を抱き続けなければならない（成功している時に十分なお金を貯めておけば大丈夫だが）。浮き沈みの激しい芸能人のような存在になるのである。山崎正和氏は「平等観ある社会へ」（「中央公論」編集部編『論争・中流崩壊』所収）で「21世紀の富裕層が従来にまして不安定であり、はかない偶然に支配される……先端を切る知識産業は、内容が投機であれ企画や発明であれ、人知では計れない運命に左右される。固定資産と巨大組織に基礎をおいて、成功すれば果実を維持しやすい工業社会の富裕層とは違うのである。ベンチャーは文字通りの冒険であり、情報の創造は芸術制作と同じように成功の持続を保証しない」と指摘している。成功した富裕層が社会保障のための税負担を嫌い、国を捨て、税負担の少ない国に移民する可能性もある。富裕層だけが住む国というのができるかもしれない。そうなると、ほとんどの国は貧困にあえぐことになり、物が売れなくなり、富裕層も困ることになるのだが。

「ロボット化」により「情報の創造過程」を担当する能力のない人間の仕事がなくなり、「情報の創造過程」を担当する成功者も、その成功が長続きする保証はないという社会が、近代化（産業化）の究極である「暗黒の情報社会」である。ポスト産業社会（私は「ハイパー産業社会」と呼ぶべきだと考えているが）、情報社会、知識社会、知識基盤社会がすばらしい社会であるかのように喧伝する論者が多いが、彼・彼女らは間違っている。ポスト産業社会、情報社会、知識社会、知識基盤社会は多数の人々が不幸になる暗黒の社会である。

6. 高度知識労働者の一時的な栄華

「5. 「情報の複製過程」を価値あるものと思わせてきた仕組みの破壊」で「具体的マニュアル」にしたがって仕事をする人の価値が低下していることについて述べたが、「抽象的マニュアル」にしたがって仕事をする人の価値は低下せず、むしろ、高くなっている場合もある。これは、「抽象的マニュアル」にしたがって仕事をする人は、複雑難解な「抽象的マニュアル」を学ぶことが困難であること、また、「抽象的マニュアル」を実際の仕事に適用する際に「抽象的マニュアル」に書かれていないことを補う必要がある（抽象化の際に捨て去った要素を補う必要がある、また、理論体系の不完全な部分も補う必要がある）ことによる（補う能力には個人差があるので、能力が高い人は尊重される）。この問題は理系と文系に分けて考える必要がある。

理系の分野で「抽象的マニュアル」にしたがって仕事をしている人は、自分が工学、農学、医学、理学などの「抽象的マニュアル」にしたがっていることは自覚しているはずである。しかし、日々の仕事では、「抽象的マニュアル」を応用して解かなければならない問題や、「抽象的マニュアル」に書かれていない問題に直面する場合もある。この時、自分の力で問題を解いたり、「抽象的マニュアル」を補って仕事をしていると思っているかも知れないが、問題を解いたり、「抽象的マニュアル」を補うための知識（明瞭に記号

化されていないという点では、暗黙知と言った方が良いかも知れない) のほとんどは自分で考え、作り出したものではなく、前例にしたがったり、他人の仕事のやり方を見よう見まねで覚えたり、不完全な言葉（アドバイス、示唆のようなもの）で伝えられたりしたものを自分で考え出したように誤解しているだけである。もちろん、創造的なものもあるが数少ない。

したがって、「抽象的マニュアル」を補っている知識を「記号化」し、また、「抽象的マニュアル」を細分化して、「具体的マニュアル」にすることができれば、従来は「抽象的マニュアル」を習得した専門家が一人で行っていた仕事を「細分化」して、何人かで分業することで、専門家でなくてもできるようになる。この結果、専門家の仕事は減り続け、最後に残るのは、本当に創造的な仕事のできる少数の専門家と「具体的マニュアル」を作る少数の専門家だけということになるであろう。

ただし、医師、歯科医師、弁護士、会計士など専門職の場合は法的な資格制度がそのような動きの歯止めになる。資格も持たない人間の参入を禁止し、資格試験で一定の知識を要求し、資格をとることのできる人数を制限することにより、自分たちの地位と威信を維持しているという構造は容易には突き崩せない。

文系の分野で「抽象的マニュアル」にしたがって仕事をしている知識労働者は、弁護士、会計士などの専門職を除いて、自分が法学、政治学、行政学、経済学、経営学、会計学などの「抽象的マニュアル」にしたがっているとは思っていないはずである。文系の分野の「抽象的マニュアル」は、理系の分野の「抽象的マニュアル」に比べると完成度が低い。また、行動の予測が困難な人間を相手にする仕事なので不確実性が高く、「抽象的マニュアル」に書かれた理論通りにいかない場合も多い。そのため、自分たちは日々、揺れ動く混沌とした現実に立ち向かい、正解のない問題を解こうとし、前例のない判断を繰り返しているのであり、「抽象的マニュアル」にしたがって仕事をしているのではないと思っているはずである。学校で勉強した「抽象的マニュアル」など何の役にも立たないと思っている人も多い。しかし、その人たちも、実際には、ビジネス書・雑誌を読んだり、その分野の有名人の話を聴いたりという形で、「抽象的マニュアル」を部分的に学び、使っている（役立っているのは実務家が経験に基づいて作ったマニュアルであり、学者が作ったマニュアルはあまり役に立たないという分野が多いと思うが）。完成度が低い「抽象的マニュアル」を現実に適用するためには、「抽象的マニュアル」に書かれている内容を取捨選択し、修正し、書かれていないことを多数補わなければならない。理系の専門家に比べると、大量の知的作業が必要である。しかし、「抽象的マニュアル」を取捨選択し、修正し、補うための知識のほとんどは自分で考え、作り出したものではなく、前例にしたがったり、他人の仕事のやり方を見よう見まねで覚えたり、不完全なことば（先輩のアドバイス、示唆等）で伝えられたりしたものである。それを自分で考え出したように錯覚しているのである。

したがって、「抽象的マニュアル」を取捨選択し、修正し、補っている知識を「記号化」

することによって「抽象的マニュアル」を完成度の高いものにし、また、「抽象的マニュアル」を細分化して、「具体的マニュアル」にすることができれば、従来は、当該分野のベテランが一人で行っていた仕事を「細分化」して、何人かで分業することで、ベテランでなくてもできるようになる。この結果、習熟が必要な仕事は減り続け、最後に残るのは、本当に創造的な仕事のできる少数の知識労働者と「具体的マニュアル」を作る少数の知識労働者だけということになるであろう。

ただし、複雑で予測困難な事象の多い文系の分野の「具体的マニュアル」化は、比較的単純で予測困難な事象の少ない理系の分野の「具体的マニュアル」化に比べると、はるかに困難なので、長い年月を要するであろう。

「抽象的マニュアル」の「具体的マニュアル」化や「抽象的マニュアル」を使って行う仕事の「機械化」は、「抽象的マニュアル」を補うための知識が少なくて済み、「記号化」や「機械化」が容易なものから進んでいる。この結果、低レベルの知的労働をしている人が不要になり、「抽象的マニュアル」にしたがっている仕事の中で、「抽象的マニュアル」を補う知識が多く、「記号化」が困難なものに占める割合が増えている。このため、「抽象的マニュアル」にしたがって仕事をする専門家の業務が高度化しているように見える。つまり、「知識社会化」しているように見えるのである。

いわゆる「知識社会」では、知的労働と熟練労働の需要が減少し、単純労働の需要が増加し（ただし、単純労働の需要は低賃金の発展途上国に向かうため、先進国では単純労働の需要が減少し、発展途上国では単純労働の需要が激増する）、低レベルの知識労働者と熟練労働者が不要になっている。そして、低レベルの知識労働者と熟練労働者が不要になっているため、中産階級の没落が起こる。斉藤貴男氏は『機会不平等』（P.25-27）で櫻井修氏の次のような発言を紹介している。

95年7月14日、……東京・市ヶ谷の私学会館……で催されていた私立大学の学生生活指導担当者らの研修会で、櫻井修・住友信託銀行相談役……の講演「これからの大学教育に対する期待」が始まった。……

「本来、大企業が生き残るためには、どういう形であるべきか。トップの能力が重要なのは無論だか、そのトップを支えるきわめてブリリアントな幹部要員、参謀本部が必要です。ほんのひと握りでいいが、人柄がよいなんてことではなくて、徹底的に勉強してきた人間でなければならない。それからマネジメントのプロと大量のスペシャリスト集団。これも一括採用した正社員たちの中から企業が育てればよいなどという生半可なものではなくなっている。現時点で必要な人材を、その人材が要求する金額で採るとなれば契約社員のような形になって、これだけでも新卒一斉採用は崩れるしかないのです。あとはロボットと末端の労働力ですが、賃金にこれほどの差があるのでは、申し訳ないけれど東南アジアの労働力を使うことになるでしょう。……」

これは、「具体的記号化」の進展により、「トップ」、「幹部要員」、「参謀本部」、「マネジメントのプロ」、「スペシャリスト集団」以外の低レベルな知識労働者は不要になり、単純労働は発展途上国に移されるか、「機械化」される、つまり、日本国内では失業者が増加するという宣言であろう。失業したくなければ、発展途上国なみの低賃金で働けということでもある。なお、生き残った高レベルの知識労働者の仕事もどんどん「具体的記号化」されていき、切り捨てられていく。また、多国籍企業では、高レベルの知的労働も賃金の低い発展途上国に移されていく。ただし、「情報共有・連結の経済性」（私の造語、「第4回教育の経済効果（その2） 6. 「情報共有・連結の経済性」の基盤形成」参照）を発揮させるためには、知識労働者は一カ所に集まっていた方が良いので、世界は、知識労働者が集まる国と、単純労働者が集まる国に分かれるかもしれない。

理系の分野の「抽象的マニュアル」には高度化しているものが多い。しかし、行き詰まっている分野も多い。全体を通して眺めると、科学・技術の進歩が加速化しているとは言えないと思う。文系の分野はほとんどが行き詰まっている。新たな経営手法とか、新たな金融商品とかが喧伝されるが、いつのまにか、流行が終わり、消え去っていることが多い。中身をよく検討してみると、画期的なものなどなく、昔のものの焼き直しに過ぎなかったり、当たり前のことを難しい用語で概念化したり過ぎないものも多い。

理系の分野に高度化しているものが多く、文系の分野に行き詰まっているものが多いのは、パラダイムによる「標準規格化」の有無の影響が大きい。パラダイムは、トーマス・クーンが、『科学革命の構造』で提起した概念であり、「一般に認められた科学的業績で、一時期の間、専門家に対して問い方や答え方のモデルを与えるもの」（まえがき P.5）である。言い換えれば、ある特定の時代の科学者集団の共通の思考の枠組みである。例えば、ニュートンは『プリンキピア』（1687年）で、新しい力学のパラダイムを打ち立て、アインシュタインの相対性理論の登場まで、力学の研究者は、ニュートンが打ち立てたパラダイムに基づいて、そのパラダイムに基づく理論を精緻化する方向で研究を行ってきた。つまり、科学者は、ある特定の時代の科学集団が持つパラダイムの枠組みの中で研究をおこなうのである。これをクーンは、パズル解きとしての「通常科学」と呼んでいる。パラダイムが問題を与え、それに対する解答の仕方、ルールを示してくれるのである。共通のパラダイムが一度受け入れられると、その科学者集団は、その根本原理を再吟味する必要性から解放されて、より細かい深部に注意を集中できる。そうすると、問題を解く能率が向上する。「通常科学」の研究が進むと、専門家仲間内でしか通用しない用語や特殊な技術を発展させ、ますます常識とかけはなれた概念の精密化を要求することになる。このように専門化が進むと、科学者の視野は非常に狭くなり、パラダイムの変革に抵抗するようになる。自然科学の教育では、独創的な科学文献ではなく、理論を系統的に説明する教科書が用いられる。この結果、学生は、理論を証拠があるから受け入れるのではなく、教師や教科書の権威において受け入れることになる。このよう

教育方法が科学者のパラダイムへの信頼を生み出す。19世紀以降、ニュートン力学のパラダイムでは説明困難な事実や解決不可能な問題（変則性）が発見されるようになってきたにもかかわらず、「通常科学」の研究者は、この変則性を正面から認めようとはせず、エーテルの存在を仮定するなどの場当たりの理論の修正までして、ニュートン力学のパラダイムを維持しようとした。問題がうまく解決できないのは、パラダイムが悪いのではなく、研究不足が原因であると考えてしまうのである。しかし、やがて、そのような努力は破綻し、「通常科学」から、新しいパラダイムを探し求める「異常科学」へと移行し、多数の理論が並立するようになる。パラダイムの場当たりの修正から始まり、パラダイムの根本的な変革に至る。また、パラダイムによる支配が揺らぐこの時期には、科学者が変則性に気づきやすくなり、新発見が多く現れる。その中から、アインシュタインの相対性理論が新しいパラダイムとして多くの科学者に受け入れられるようになった。「科学革命」の引き金を引くのは、若い科学者、他の分野から参入した科学者など、パラダイムから比較的自由的な立場にある人物であることが多い。このようなパラダイムの大転換を、クーンは、「科学革命」と呼ぶ。なお、クーンの『科学革命の構造』には論旨不明瞭な面があるため、以上の説明には、私の解釈が多少混入している。

文系の分野は、パラダイムが並立する「異常科学」の状態を永続しているが、各派は自分たちが「通常科学」の状態にあると誤解し、自派に属しない人々は間違ったパラダイムを信じていたり、単なる経験論・印象論に過ぎないことを主張したりする非科学的な人間だから無視して良いと決めつけ、現実離れしたパラダイムに基づいた理論の精緻化を行い、その理論を正当化してくれる証拠集めに奔走し、都合の悪い事実は無視している。あるいは、現実への適合性を高めようとして、単純明快だった原型にごちゃごちゃと付け足して、複雑難解なものになっていくが、いつまで経っても、現実への適合性は高まらない。それでも、学者たちは自分たちの学問分野が高度化したと思っている。高度化ではなく、単なる複雑化である。「バカの壁というのは、ある種、一元論に起因する……バカにとっては、壁の内側だけが世界で、向こう側が見えない。向こう側が存在しているということすらわかっていなかったりする」（養老孟司著『バカの壁』P.194）。これが、文系の分野の行き詰まりの原因である。

他方、理系の分野は、新しいパラダイムに基づいて「通常科学」が進展している分野もあるが、「通常科学」が行き詰まっているのに、「科学革命」が起こる気配のない分野が多い。研究の分野にも短期的な成果を求める成果主義、競争主義の原理が押し寄せてきて、手っ取り早く、理解容易な成果の出る「通常科学」に集中しているからである。「科学革命」を起こそうとすると、何年、何十年も目に見える成果を出せない、あるいは、成果を出しても周囲からなかなか理解されないという状況に耐え続けなければならないが、短期的な成果主義、競争主義の下では、そのような研究者は生きていくことができないのである。また、専門分野の「細分化」が進み、各専門分野のパラダイムが異なるため、相互理解が困難であり、学際的な研究が進まず、地球環境問題などの複合的な問

題にうまく対処できない。これが、理系の分野の行き詰まりの原因である。

技術も理系と同様の状況にある。短期的な成果を求める成果主義、競争主義の下で、安全に成果の出せる「インクリメンタル・イノベーション」に集中し、一か八かの「ラジカル・イノベーション」に挑戦する人はいなくなりつつある。

情報量が増えているので「知識社会化」しているように見えるが、知識の上で画期的な進歩がない世界になってしまったのである。

7. 人間と自然の「標準規格化」

人間を、学校やマスコミから得た知識を使って同じように考え、規則や慣行・慣習にしたがって同じように行動する「擬似ロボット」に改造して「標準規格化」し、自然を人工的なものに作り変えて「標準規格化」し、予測困難な現象が発生することを防ぐことができれば、全ての事象の発生を予測でき、世界の全てを記号によって正確に記述できる世界（マックス・ウェーバーの言う「合理性の鉄の檻」）が生まれ、全ての分野を「具体的記号化」できる。

都会では、人びとは、予測困難な暴風雨・落雷・毒虫・毒蛇から身を守るために「標準規格化」された家に住み、予測可能な温度・湿度を作り出す「標準規格化」されたエアコンを使い、予測可能な時間に予測可能な場所で開店している「標準規格化」されたスーパーマーケットで、予測可能な代金を支払い、「高速」に調理でき、予測可能な味になる「標準規格化」された冷凍食品・レトルト食品を買って食べ、予測可能な時間に起きるために「標準規格化」された目覚まし時計をかけ（予測可能な時間に眠るために「標準規格化」された睡眠導入剤を使う人もいる）、予測可能な時間で「高速」に移動できる「標準規格化」された道路・自動車・鉄道を利用している（たまに予測困難な遅延が発生するが、それに対処するために人工的な交通情報の提供がある）。たまに予測困難な事態が発生すると、人びとは、「標準規格」から外れた欠陥住宅、欠陥エアコン、スーパーマーケット経営者の怠慢、不良食品、欠陥時計、道路管理者の怠慢、欠陥自動車、鉄道経営者の怠慢だと文句を言う。

企業・学校では、人びとが家に住み、エアコンを使うことによって健康を保ち、目覚まし時計をかけ、道路・自動車・鉄道を利用することによって、毎日・定時に出勤・登校してくるということを前提にしてマニュアルが作られている。例えば、生徒が何日・何時に登校してくるか分からないという状態では、学校は効率的なカリキュラムを作れない。生徒が毎日・定時に登校してくれるから、教育活動という「情報の複製」（多人数を相手にした一斉授業）が容易になるのである。眠たい時に眠り、自然に目が覚めるまで眠り続ける、つまらない授業を聞いていると眠くなってくる、気分が乗ったときに勉強し、気分が乗らないときにはだらだらしているという人間本来のリズムにしたがう生徒は、「標準規格」から外れ「高速化」に抵抗する「怠け者」とされてしまう。さらに、生徒がみんな「標準規格化」され、同一の能力と性格を持ってくれていると、個性に配慮する必要がなくな

るので、教育活動という「情報の複製」は一層、容易化・完全化する。そのため、入学試験等によって、ある程度「標準規格化」された生徒を集めることができる私立の中高一貫校の人气が高まる。

河川には予測困難な洪水に対処するために「標準規格化」された堤防が、海岸には予測困難な津波に対処するために防波堤が、それぞれ築かれているが、たまに大洪水が発生して堤防が決壊したり、大津波が来て防波堤を越えたりすると、予測が甘いといって、政府・自治体の責任が追及されたりする（「標準規格」から外れているので、法的責任がある）。人びとは、洪水や津波が来ないという予測の下で、日常生活、企業活動を営んでいるからである。

都会を離れて自然に触れ合おうと思って山に行っても、人びとは本当の自然には接していない。山を自由に歩くと予測困難な危険に遭遇することがあるので、人工的な登山道を「標準規格化」された地図・ガイドブックにしたがって歩かなければならない。転倒・転落という予測困難な現象が発生することを防ぐために、危険な箇所には人工的な鎖・はしごがつけられたり、人工的に階段状に整備されたりしている。スリップ・捻挫という予測困難な現象を防ぐために「標準規格化」された登山靴を履き、降雨という予測困難な現象に対処するために「標準規格化」された雨具を持参し（降雨という予測困難な現象に対処するために「標準規格化」された天気予報があるのだが、当てにならない）、毒虫に刺されるという予測困難な現象を防ぐために、「標準規格化」された虫除けスプレーを吹きかける。そして、暴風雨・落雷という予測困難な現象に対処するために人工的な山小屋に泊まる。しかし、そこまでもしても、予測困難な危険を防ぐことができず、たまに、事故・遭難が発生する。遭難が発生すると、予測困難な危険に対処するために「標準規格化」された装備を十分にせず山に登った奴の自己責任だから助ける必要はないという意見まで出てくる。予測困難な危険のない人工的な都会を勝手に抜け出し、予測困難な危険だらけの（本当の）自然に接した人間は、非合理的な行動をとる異常な人間であるということである。

自然をどれだけ人工的なものに作りかえ、「標準規格化」しても、対処できない自然の脅威がある。例えば、大地震が起これば、人工的なものの多くが、家も、道路・鉄道も、堤防・防波堤も破壊されるし、巨大隕石が地球に衝突すると、人工的なものの全てが破壊されてしまう。我々は、そのような自然の脅威に目をつぶることによって、予測可能な人工的な世界という幻想の中で、安心して生活しているのである。

マクドナルド化された組織は、従業員をマニュアルという「標準規格」に必ずしたがう人間に改造しようとしている。マニュアルにしたがわないと昇進できない、首になる。工場では、「標準規格化」された機械の動作パターンに合わせて、「標準規格化」された作業をすることが要求される。「標準規格化」された作業をしないと首になる。「標準規格化」されたパソコンは「標準規格化」された方法で操作しないと動かないので、「標準規格化」された方法を覚えないと「情報弱者」と呼ばれ、軽蔑されてしまう。自動販売機、ネット

ショッピング、銀行の ATM はシステムにより消費者に「標準規格化」された行動をとることを強いている。「標準規格化」された行動をとらないと物を買えない、お金を出せない。自動販売機、ネットショッピング、ATM の使い方が分からないと文句を言うような客は、販売・支払いという「情報の複製」の容易化・高速化・正確化を妨害する不良顧客なので、相手にしない。相手にしていると手間ばかりかかり、利益が出ない。テレビゲームは、記号によって表現されたバーチャル・リアリティの世界で、ゲームをする者に「標準規格化」された行動をとることを強いている。「標準規格化」された行動をとらないとゲームに勝てない。そして、学校は、学校という人工的な世界の中で、「標準規格化」された行動を強いる校則に必ずしたがって、「標準規格化」された内容を学習し、試験で「標準規格化」された解答をすることを強いている。「標準規格化」された行動を強いる校則にしたがわないと「不良」呼ばわりされ、「標準規格化」された内容を「高速」に学習し、「標準規格化」された試験で「標準規格化」された解答を「高速」でしないと「落ちこぼれ」呼ばわりされる。「標準規格化」に抵抗する「不良」、「落ちこぼれ」は、教育活動という「情報の複製」（多人数を相手にした一斉授業）の容易化・高速化・正確化を妨害するだけでなく、経済活動という「情報の複製」（大量生産等）の容易化・高速化・正確化を妨害する者だからである。

完全に「標準規格化」され「擬似ロボット」になった人間が「マニュアル人間」である。「擬似ロボット」への改造に反抗する者が「不良」、「落ちこぼれ」、「引きこもり」、「異常者」、「自由を求める創造的な人間」である。「不良」、「落ちこぼれ」は、「不良」、「落ちこぼれ」とはこういう姿であるべきだという明文化されていないマニュアル、つまり慣習に縛られ、自ら望んで、「ロボットの人間」（完全には「擬似ロボット」化されていないが、自由がほとんどない人間）になっている。ただし、日本では、「不良」「落ちこぼれ」が集まる「世間」の「しきたり」や「空気」にしたがう「ロボットの人間」になっている（第 13 回 日本の特殊性と教育 3. 「空気」の支配 参照）。「擬似ロボット」や「ロボットの人間」にならないのは「引きこもり」、「異常者」、「自由を求める創造的な人間」であるが、「引きこもり」には生活苦が、「異常者」には病院か刑務所が、「自由を求める創造的な人間」には「擬似ロボット」や「ロボットの人間」からの迫害が待っている。

私たちは、あらゆる領域で、何かに支配され、それに服従し、文句を言わずに「標準規格化」された行動をとる「擬似ロボット」に改造されている。しかし、そのことに気づいている人は少ない。例えば、地図・ガイドブックにしたがって登山道を歩いている人は、地図・ガイドブックに支配され、服従している、テレビゲームで遊んでいる人は、テレビゲームに支配され、服従していると言うと、何を馬鹿なことを言っているのだというのが一般的な反応であろう。安全や楽しみのために地図・ガイドブックを参考にしているのだ、テレビゲームで勝つための方法を探求しているのだ、だから、支配され、服従などしていないというわけである。しかし、地図・ガイドブックを参考にすると、その人の歩き方は、地図・ガイドブックによって「標準規格化」され、テレビゲームで勝つための方法を探求

すると、その人の遊び方は、勝つための方法によって「標準規格化」される。何かを学習している（模倣している、同調している、参考にしている、信仰している）と考えるのか、何かに支配され、服従していると考えるのかは、その人の心の持ち方次第なのである。自分より優れていると思うもの、あるいは多数の人が考え、行動していると思うことに対しては、自分に利益を与えてくれることを学習していると感じ、自分より劣っていると思うもの、あるいは少数の人が考え、行動していると思うことに対しては、自分から利益を奪うものに支配され、服従していると感じるのである。「アップルの信者」（アップルの製品は優れていると考えているから、それを使っている人）と「マイクロソフトの奴隷」（マイクロソフトの製品は劣っていると考えているが、みんなが使っているので、仕方なしにそれを使っている人）の違いのようなものである。パソコンや携帯電話などの操作方法を覚えるのに苦労された中高年の方であれば、この微妙な違いを分かっていただけではないだろうか。

ガブリエル・タルドは『模倣の法則』で次のように指摘している。なお、『模倣の法則』の原書（第2版）は1895年に出版されているため、書かれている内容が古いことに注意する必要がある。

人々が生活している環境に固有の訛りや礼儀、観念、感情の模倣が無意識的であることや、他者の意思の模倣（私は自発的な服従というものをこれ以外のものとして定義することができない）が非意図的であることは明らかである。（P.274）

軽信と盲従、すなわち信念の模倣と欲求の模倣……私が服従を模倣の一種として考えてきたことを意外に思う人もいるかもしれない。しかし、両者が同じものとみなされるのは必然であり、その根拠を説明することも容易である。……ある人が別の人を模倣するとき、あるいは、ある国のある階級が別の階級の衣服、調度品、娯楽をモデルにして衣服をそろえ、家具を集め、余暇を過ごすようになるとき、前者はすでに後者の欲求や感情を借用している。というのも、それら衣服や娯楽は、後者の欲求や感情の外的表現だからである。このように模倣する側は模倣される側から意欲を借用することができるだけでなく、そうせざるをえないのである。つまり、模倣する者は模倣される者の意思にしたがって欲求するのである。……力があって権威主義的な人は弱い人々にたいして抗しがたい権力を振るう。強者のほうは弱者のもたないもの、すなわちひとつの方向性を彼らに示すのである。彼にしたがうことは義務ではないが、必要とされる。……服従は信仰と姉妹関係にあるのである。人々が何かに服従することと何かを信じることは同じ理由にもとづいている。そして人々の信仰がひとりの伝道師の信仰の放射であるのと同じように、人々の活動は指導者の意思の伝播にほかならない。彼らが望むもの、それは指導者が望んでいる（あるいは望んだ）ものである。そして彼らが信じるもの、それは指導者が信じている（あるいは信じた）ものである。だからこそ、指導者が話したり実践したりすることを、今度は人々のほうが自分から話したり実践したりするようにな

る（あるいはそうしようとする）のである。実際、もっとも模倣の対象になりやすい人々あるいは階級とは、人々がもっとも服従する相手である。大衆は、王や宮廷、上流階級の支配を受け入れるにしたがい、つねに彼らを真似するようになる。……家族においては……模倣が服従や軽信と緊密に結びついていることをはっきりと見てとれる。父親は、とくにはじのうちは、子供にとって無謬の神託であり、最高の王である。つまり、父親は子供にとっての至上のモデルなのである。（P.279-281）

人間には、模倣によって学習する本能がある（「4.記号化、機械化、標準規格化、細分化、高速化」参照）。模倣によって人間の言動は「標準規格化」される。私は、模倣の本能が、自分より優れていると思う（尊敬できる）ものに向かう場合と、多数の人が考え、行動していると思うことに対して向かう場合があると考えている。どちらの方が利益が多いかは、環境や文化・宗教の影響を受ける社会システムのあり方によって変わってくるからである。例えば、自分たちを滅ぼそうとする強力な外敵に脅かされている開放的な社会は、敵との戦いに勝ち生き残ることが重要なので、父性的な社会となり、模倣の本能が自分より優れていると思うものに向かい、自分たちを滅ぼそうとする強力な外敵のいない閉鎖的な社会は、仲間内で助け合い平和を保つことが重要なので、母性的な社会となり、模倣の本能が多数の人が考え、行動していると思うことに対して向かうのではないだろうか。模倣の本能が自分より優れていると思うものに向かう場合が「権威への依存」であり、欧米に多く見られ、模倣の本能が多数の人が考え、行動していると思うことに向かう場合が「多数派（を装うもの）への同調」であり、日本に多く見られる。なお、ここでは「権威」を精神的影響力という意味で使っている。「威信」と言った方が良いのかもしれない。また、「父性」「母性」という言葉を河合隼雄氏の区分にしたがって使っている。母性と父性に関して、河合隼雄氏は『母性社会日本の病理』で次のように述べている。

母性の原理は「包含する」機能によって示される。それはすべてのものを良きにつけ悪しきにつけ包みこんでしまい、そこではすべてのものが絶対的な平等性をもつ。「わが子であるかぎり」すべて平等に可愛いのであり、それは子供の個性や能力とは関係のないことである。しかしながら、母親は子どもが勝手に母の膝下を離れることを許さない。それは子どもの危険を守るためでもあるし、母—子—一体という根本原理の破壊を許さぬためといってもよい。……父性原理は「切断する」機能にその特性を示す。それはすべてのものを切断し分割する。主体と客体、善と悪、上と下などに分類し、……子どももその能力や個性に応じて類別する。極端な表現をすれば、母性が「わが子はすべてよい子」という標語によって、すべての子を育てようとするのに対して、父性は「よい子だけがわが子」という規範によって、子どもを鍛えようとするのである。（P.19-21）

仏教や道教などが母性の宗教であるのに対して、キリスト教やユダヤ教は父性の宗教であるといわれる。母なるものの宗教は、母と子の一体性をその根本においている。そ

ここでは、すべてがひとつとなって、主体も客体も、人間も自然も、善と悪とさえも区別がなく、すべて救われるのである。……これに対して父なるものの宗教は、父なる神の規範に従うか従わないかが決定的なこととなる。父との契約を守る選民のみが救済の対象となるのである。そこでは、神と人、善と悪などが判然と区別される。(P.66)

権威への依存は、家父長、氏族長、君主、神、カリスマなどの「人的権威」(過去のカリスマ、つまり、偉大な家父長、氏族長、君主、神などの言行を伝承した「慣習」も含む)への依存(以後「人的権威システム」と呼ぶ)、法、思想、教典などの「記号的権威」への依存(以後「記号的権威システム」と呼ぶ)、科学的方法、民主主義などの「方法的権威」への依存(以後「方法的権威システム」と呼ぶ)に別れる。

「人的権威システム」は家父長制(家長権を持つ男子が血縁・婚姻集団を統率する形態)に基づく血縁・婚姻集団から血縁・婚姻的要素が次第に消えていって生まれたものである。欧米社会は、近代化によって、「人的権威システム」から、「記号的権威システム」と「方法的権威システム」の混合システムへと移行した。「記号的権威システム」と「方法的権威システム」の混合システムの下では、教育によって「記号的権威」と「方法的権威」を学び、身につけた者が借り物の権威を帯びるようになり、学歴主義が生まれる。教育を受けた者に人間としての「人的権威」があるのではない。教育を受けた者が権威ある「記号」を語り、権威ある「方法」を実行することに権威があるのである。

マックス・ウェーバーが『支配の社会学』で行っている支配の分類——合法的支配、伝統的支配、カリスマ的支配——にならって、「人的権威システム」を「伝統的権威システム」と「カリスマ的権威システム」に区別することもできる。私は、伝統的権威は、過去のカリスマの後継者であるとみなされることや、過去のカリスマの言行を伝承した慣習であるとみなされることから生まれると考えている。「記号的権威システム」は「合法的支配」、「形式合理性」にあたる。

「人的権威システム」から「記号的権威システム」への移行には、「声の文化」から「文字の文化」への移行が必要である(「第4回 教育の経済効果 3.学校における「社会化」の隠された実体」「第8回 能力の個人差 10.認知的文化の差—声の文化と文字の文化」「第9回 教育と格差の再生産 4.環境の違い→努力差→教育格差」参照)。「記号的権威」に依存するためには、「文字の文化」の「人間の生活世界を記号によって抽象化した理論モデルを用いた」「状況依存的ではない、形式論理的な」認識と思考(「抽象的思考」)が必要だからである。「声の文化」に親和的で、「人間の生活世界に密着した」「状況依存的であって、抽象的ではない」認識と思考(「具体的思考」)をする人は、理論よりも実践だと考え、「記号的権威」に反抗し、目に見える優れた実践を示してくれる「人的権威」に依存しようとする。

「多数派(を装うもの)への同調」のことを、日本では、「世間体を気にする」とか「場の空気を読む」と表現する。「多数派(を装うもの)への同調」は、多数派を作る、ある

いは装う「力」の強いものへの同調につながる。このことを日本では、「長いものには巻かれよ」と表現する。「長いものには巻かれよ」とは「権威（精神的影響力）への依存」（心服、内面的同調、権威を信じ権威から学ぼうとする意思）ではなく、財力、許認可権、人事権などの「力（物理的影響力）への依存」（追従、表面的同調、利益を得たり制裁から逃れたりするための上辺だけの服従）である。そのため、「多数派（を装うもの）への同調」には模倣による学習という動機以外に、模倣によって利益を得たり制裁を逃れたりしようとする動機もある。

多くの人々が「権威への依存」をすると、多くの人々の言動が共通化（「標準規格化」）され、表面的には「多数派への同調」のように見える。そのため、権威主義者が「多数派への同調」を見ると「権威への依存」であると勘違いしてしまう。日本人が権威主義的であるという誤解はそのようにして生まれたのであろう。「第13回 日本の特殊性と教育 3. 「空気」の支配」で述べるように、日本人は反権威主義的である。ただし、横暴な「力」の行使に対抗できる絶対的権威（神の言葉、普遍的価値、真理など）を信じていないので、「力」に弱い日和見主義者である。

「権威への依存」（特に「記号的権威への依存」）による人間の言動の「標準規格化」は、公的機関が「標準規格」を定める「デジュレ・スタンダード」（de jure standard）にあたり、「多数派（を装うもの）への同調」による人間の言動の「標準規格化」は、市場競争の結果、勝利したものが業界標準となる「デファクト・スタンダード」（de facto standard）にあたる。

「権威への依存」や「多数派（を装うもの）への同調」が支配する社会では、「権威への依存」や「多数派（を装うもの）への同調」による「標準規格化」に抵抗する者は「異常者」とみなされてしまう。山本雅男氏は『ヨーロッパ「近代」の終焉』（P.144-146）で次のように指摘している。

ふつうの正常な行動と呼ばれているものを考えてみると、興味あることが見えてくる。つまり、われわれが日常生活のなかで無意識に作り上げている約束事、社会的コードに外れないことを正常な行動と呼んでいるのではないかということだ。たとえば、皆が真剣に話し合っている会議中に突然奇声を発したり、机の上を歩き出したりしたら、即刻異常者としてつまみ出されるだろう。……あるいは、謹厳で通った部長が、ある日真っ赤なスーツを着て現れたら、どうかしてしまったのではないかと疑われるに違いない。……ところが、これらのことはたんなる約束事にすぎないのだ。本質的な根拠はどこにもない。ようするに、社会生活があるていど円滑に進めるために考え出されたものに過ぎない。われわれは、そうした約束事、社会的コードの網のなかで、絶えずそれを気にしながらそれに外れまいとして生きている。外れないことが正常だと自他ともに思っているからだ。……こう考えてくると、本来自由であるはずの自己を拘束している正常者のほうが、むしろ異常なのではないかということになってくる。かえって、自己の自由

に忠実で、約束事から解放されている異常者とされている人間のほうが、人間の本来の姿を現しているのではないかと考えられる。……異常者に関する研究が示した成果のひとつは、異常者と考えられていた人びとの無拘束な精神状態のなかにかえって自然な精神の状態を見るという逆説であった。……正常だと思って生活している日常世界が、精神の歪曲と抑圧を本質としていることだけは確かなところだ。

寒冷・乾燥な気候のヨーロッパで生まれた背広とネクタイを温暖・湿潤な気候の日本で着て、汗だくになり、仕事の効率を低下させ、周囲に悪臭を巻き散らかしているという非合理なことがまかり通っているのは、ヨーロッパという「権威への依存」だからであり、みんなが背広を着てネクタイを締めているから、自分も背広を着てネクタイを締めるという「多数派への同調」だからである。女性が歩きにくいハイヒールを履いて、転倒したり、捻挫したり、外反母趾になったりするという非合理なことが流行しているのは、欧米のファッション（足が長いことが美しいという美的観念等）という「権威への依存」や、みんながハイヒールを履いているから、自分もハイヒールを履くという「多数派への同調」だからである。「権威への依存」や「多数派への同調」は、このような非合理なことを正常だとしてしまうことがある。

「権威への依存」については次節で、「多数派（を装うもの）への同調」については、「第13回 日本の特殊性と教育」で詳しく論じる。

8. 権威への依存

山本雅男氏は『ヨーロッパ「近代」の終焉』で次のように指摘している。

プロテスタントの主張……のなかに、……宗教改革の「近代」性を読みとることができる。……“聖書のみ、恩寵のみ、信仰のみ”という三点にまとめて考えてみよう。第一の“聖書のみ”は聖書至上主義とも言われるもので、ようするに、いかに生きるか、いかに神によって救われるかは、聖書によってのみ伝えられるというものである。……聖書中心主義は、まさに原理主義であり、それからの逸脱を絶対に許さないという厳格主義を生み出す。……つぎの“恩寵のみ”という主張は、……救われるかどうかはいつさい神の御心・恩寵によるものであり、人間はただひたすらにそれに縋るしかないというのである。この主張にはふたつの側面がある。ひとつは、信仰の主体を個人においた点である。……近代的個人主義の色彩の濃い主張だと言わなくてはならない。……もうひとつは、神への絶対服従という問題である。つまり、神の恩寵に縋るかぎりにおいてのみ救いへの道が開かれるのであって、人間の側には判断の余地はまったくないというのである。……プロテスタント的人間観が、その出発点において、信仰における個人の重要性を確認するとともに、神という超越的なものの絶対性・必然性の前では人間はまったく無力であることを刻印したことのほうが問題である。これは、その後の「近代」

的人間像とは矛盾する考え方のように見えるが、じつはヨーロッパ「近代」型人間像の隠れた姿なのである。超越的なものというのは、何も神にかぎらないものであるから。

(P.47-50)

キリスト教の神は創造神であると同時に形而上的なものとして想像された神でもあった……だからこそ普遍性を持ちえた……近代以後になっても……命脈を保ち続けたのは、キリスト教精神の深層において近代合理主義と容易に結びつく要素があったからだ。それは、普遍性ないし絶対性への深い信頼と自信である。デカルトにしる、……ニュートンにしる、……みな普遍的・絶対的な理性を追求しながらその彼方には神を予想していた。「近代」は、……神を必要としない人間の時代と考えられているが、じつはそうではない。神に理性がとって変わったにすぎなかったのだ。(P.176)

デカルト的理性中心主義によって、……人間を取り巻く諸々の環境世界からも、精神は断ち切られた……近代的理性は、それまで精神に加えられてきた環境世界のさまざまな重圧、すなわち社会の因習や伝統、習慣といったものから自由になるために、それらをことごとく断ち切ったのだ。合理主義とは自由の代名詞であり、不合理とは束縛や従属を意味した。……環境世界の積み上げてきた過去の知恵を断ち切り、未来へと勇躍する精神にとって抛るべき縁は何か。それがまさに「方法」なのである。合理主義精神と方法的思考は、じつに密接な関係にあるのだ。習慣や伝統が教える知識は、特殊・個別的なものを多く含んでおり、どのようなところでも、いついかなる場合にも適用できる普遍的妥当性に欠ける。これでは、まことに不確実であり、依拠するに足るものではないと考えられたのである。どのような問題を出されても解けるような「方法」をしっかりと身につけていれば、いつどこにあっても困らないというわけだ。現代が“マニュアル社会”と呼ばれるのも、……当然の成り行きであったともいえる。社会のさまざまな行動がマニュアル化されることによって、いつでも、そしてだれでもそれにしがえれば、一定の目標に到達することが可能になったのである。「方法」は、時間・場所そして人間の個性を選ばないのである。それは、方程式を解く方法を覚えておけば、どのように複雑な数式であっても、一行一行着実に処理していくことによって、最後には正答を得ることができるという数学の思考法に似ている。……こうして考えてみると、近代合理主義がとらえた精神とは、じつは「方法」を実行していく能力のことにすぎないことがわかる。……デカルトは、精神を真理へと導くひとつの「方法」を提示している。……第一に、明晰判明なものだけを真として受け入れること。第二、問題の分析を十分に行うこと。第三に、分析に達した単純な真理から順序を追って複雑なものいたること。第四に、問題にしようとしてしなかった点。つまり、見落とした点がないか調べること。……この四つの規則は、その名も文字通り『方法叙説』という本のなかに登場する。この本の原題は『かれ（デカルト自身のこと）の理性を正しく導き、諸学における真理を探究するための方法についての話、ならびにこの方法の試みである、光学、気象学及び幾何学』という長いもの

だ……民主主義は、少数者の特権や独占をいかに排除し、多数者の意見を納得の原理として表出するためにいかなるシステムを作るかという理念に基づいている。……精神を方法化することによって、一部の特別な才能をもったものや卓抜な異能の持ち主だけに許されていた真理感得の秘儀を、「良識を分け与えられたすべての人」（『方法叙説』）に開放したのである。正しい「方法」にしたがえば、だれでもが確実な知識、真理に到達しようと宣言したということだ。だが、「方法」にしたがうかぎりでは、名もあり顔もある個人は必要ない。……かつての社会では、年長者や経験を積んだものがさまざまな知恵を次の世代に遺していった。……しかし、それらの知識は均質でないばかりか、なによりも、ときに間違えることがあった。……合理主義は、この不均等性と過ちの不確実性をひどく嫌うのである。人間は過ちを犯すものだというところに対する禁忌が、人間そのものに対する不信を生んだことは間違いない。（P.205-210）

人間は昔からロボットのような存在であった。慣習や長老の言葉に縛られる「ロボットの人間」として生きてきた（ただし、本人は慣習や長老の言葉という「知恵のかたまり」から学んでいると考えていた可能性がある）。しかし、慣習や長老の言葉は特定の時期や場所の環境に適応するために作られたものなので、環境が変わると、慣習や長老の言葉に縛られる「ロボットの人間」はちぐはぐな行動をしてしまい、新しい環境に適応できない。また、ロボットとしては出来損ないで、時々、誤作動、つまり、慣習や長老の言葉に反するという過ちを犯した。慣習や長老の言葉にしたがう人間から見れば、予測不可能な行動をとる「異常者」、変人（「標準規格化」されない者）の存在である。環境が変わっても適応できるロボットに改造するにはどうしたら良いのか。過ちを犯さない完全な「擬似ロボット」に改造するにはどうしたら良いのか。その解決策の一つが普遍性を志向する宗教である。信仰によって神に絶対的に服従させれば、「神の言葉」に必ずしたがう「擬似ロボット」を作れる。例えば、「神の言葉」にしたがえば天国に行けるが、「神の言葉」にしたがわなければ、地獄に墮ちると信じ込ませて、「神の言葉」にしたがわせる（ただし、信者は「神の言葉」という「知恵のかたまり」を学んでいると考えている）。ユダヤ教、キリスト教、イスラム教、つまり、アブラハムの宗教には、「人間は過ちを犯すものだというところに対する禁忌」「人間そのものに対する不信」がある。遺伝子が定める本能にしたがう人間は過ちを犯すと考えている。「原罪」を背負っているのである。だから、「神の言葉」に人間をしたがわせることによって、人間が「過ち」を犯さないようにしているのである。

「神の言葉」を聖職者が口頭で伝えていると、その内容は不安定であるが、「神の言葉」を「教典」にし、「教典」を絶対視すれば安定する。宗教改革によって「記号的依存システム」が確立したのである。「教典」に書かれた変化しない「神の言葉」に必ずしたがう「擬似ロボット」、つまり原理主義者（＝石頭）だらけになれば、人間の行動は強固に「標準規格化」され、予測可能となる。

「教典」は、人間の行動だけではなく、人間の心まで「標準規格化」する。人間が、直接には観察不可能な他人の心の中を推察する際、他人の行動を観察して、自分がその行動を取る時には、自分はこう考えているから、他人もこう考えているはずだという推論から始まり、うまくいかないと、それに修正を加えていくというのが一般的である（「心の理論」）。これは、他人も自分と同じような心を持っている、つまり、他人の心は自分の心を「標準規格」にしているという仮定から始まるということである。その結果、人間が考えつくことは、全ての人間は同じような心を持っているということを前提にしたもの、つまり、人間の心が「標準規格化」されたものになる傾向がある。養老孟司氏が『バカの壁』（P.48-49）で述べているように、「意識というのは共通性を徹底的に追究するものなので。……人間の脳の特に意識的な部分というのは、個人間の差異を無視して、……同じにしようとする性質を持っている」。例えば、新古典派経済学は、全ての人間は効用（財・サービスの消費から得る満足）を最大化するように行動するとして、人間の心を「標準規格化」している。「神の言葉」が書かれたとされている「教典」は、実際には教祖（あるいは、その弟子）の言葉を書いたものである。そのため、「教典」に書かれた内容は教祖の心を「標準規格」にしている。「教典」を絶対視する人々は、教祖の心に自分の心を似せようと努力して模倣し、「標準規格化」される。

世俗的な世界での宗教改革は法治主義と近代的官僚制の確立である。法治主義によって、君主が恣意的な命令を出せないようにし、近代的官僚制によって、行政から恣意的な要素を追放したのである。この結果、政府の行動は予測可能となり、政府の命令にしたがう人間の行動も予測可能となる。マックス・ウェーバーは『支配の社会学Ⅰ』で次のように指摘している。なお、「ヘル」とは、「自分たちが要求した実際に行使している命令権力を、他の指導者による授権から導き出すのでない単数または複数の指導者」、つまり、支配者（君主など）のことであり、「装置」とは「ヘルスの命令のままに動き、「支配の維持に役立つような命令権力や強制権力の行使に参加する」「ひとびと」、つまり、支配者の部下（家臣など）である（P.27）。

近代的官僚制にとっては、「計算可能な規則」という……要素が、本来的に支配的な重要性をもっている。近代文化の特質、わけてもその技術的・経済的下部構造の特質は、正にこの・効果の「計算可能性」なるものを要求している。完全な発展をとげた官僚制は、特殊的な意味において、「怒りも興奮もなく」……という原理の支配下にもあるわけである。官僚制が「非人間化」されればされるほど、換言すれば、官僚制の徳性として賞賛される特殊の性質——愛や憎しみおよび一切の純個人的な感情的要素、一般に計算不能なあらゆる非合理的な感情的要素を、職務の処理から排除するという——がより完全に達成されればされるほど、官僚制は、資本主義に好都合なその特殊な特質を、ますます完全に発展させることになる。個人的な同情・恩恵・恩寵・感謝の念に動かされた、旧秩序のヘルスの代わりに、近代文化は正に、文化が複雑化し専門化すればするほ

ど、それを支える外的装置のために、人による偏頗のない・したがって厳に「没主観的」な専門家を要求する。(P.93-94)

「没主観性」と「専門性」とが、一般的・抽象的規範の支配と必ずしも同じことではないということは完全に真実である。……法には欠缺はないという考えは、周知のごとく原理的には激しく攻撃されている……行政活動の領域においては、……個性的ななるものの自由と支配とが要求されるのが常であり、これに対して一般規範は、〔行政〕官僚の——規則による取締りの困難な・積極的・「創造的な」——活動に対する制約として、主として消極的な役割を果すにすぎないであろう。……しかし、……この「自由な」創造力をもつ行政……は、前官僚制的諸形態……に……見る……ような、自由な〔勝手気ままな〕恣意や恩寵・個人的動機による恩恵や評価・の王国を形成するものではないはずであり、むしろ、「没主観的」目的の支配とこの目的に対する合理的な考量と献身とが、常に行動の規範として存在している……特に国家的行政の領域においては、……「国家理性」という特殊近代的な・厳密に「没主観的な」観念が、官僚の行動の最高・最終の指標として、重視されているのである。……真に官僚制的な行政の一切の行為の背後には、……合理的に論議しうるような「理由」の体系——すなわち、規範への包摂あるいは目的と手段の考量のいずれか——が存在している。(P.97-99)

近代的官僚制は未だに「形式合理性」を貫徹できていない。それは、自然を人工的なものに作り変え、予測困難な現象が発生することを防ぎ、人間を規則や習慣に必ずしたがう「擬似ロボット」に改造するということが達成できていないため、官僚がしたがうべき規則に何もかも全てを書き込むことができず、官僚に裁量の余地が残るからである。マックス・ウェーバーは、近代的官僚は、この裁量の判断にあたって、「没主観的」目的の支配とこの目的に対する合理的な考量」「国家理性」「合理的に論議しうるような「理由」の体系」、つまり、「理性を正しく導く方法」を用いるという楽観論を展開しているが、現実にはそうでない場合も多い。裁量を利用して、利益誘導が行われ、汚職が行われることが多い。例えば、補助金制度において、補助対象を特定する表現が抽象的で、具体的にどこへ補助するかは裁量の余地があるので、政治家の選挙区を優遇することができるのである。

欧米人は近代化の過程で、合理主義を身につけ、因習と宗教による束縛から解放され、自由になったと言われている。しかし、欧米人は、因習と宗教の代わりに、「理性を正しく導く方法」（その典型は「科学的方法」）とそれによって得られたとされている「真理」や「普遍的価値」に縛られており、自由にはなっていない。合理主義とその典型である科学は、「神」という「超越的なもの」を抽象化して「真理」（その典型は「科学的真理」）や「普遍的価値」という「超越的なもの」にし、聖書に書かれた「神の言葉」を聴く代わりに「理性を正しく導く方法」にしたがって「真理」や「普遍的価値」を探求し、「神の言葉」に代わって「真理」や「普遍的価値」に人間をしたがわせようとしたのである。ま

た、「真理」や「普遍的価値」が見つからない分野に関しては、「理性を正しく導く方法」を身につけた人間の多数派の意見を採用する「民主主義」にしたがって「法」を定め、「神の言葉」に代わって「法」に人間をしたがわせようとしたのである。科学革命と市民革命によって、「方法的権威システム」が確立したのである。

なお、「理性を正しく導く方法」を身につけた人間の多数派の意見を採用する「民主主義」というのは、あくまでも理念の話であって、現実の話ではない。「理性を正しく導く方法」を身につけるためには、「文字の文化」の「抽象的思考」が必要であり、学校は、「声の文化」の「具体的思考」を「抽象的思考」に改造しようとしているが、失敗し続け、「具体的思考」に止まる「落ちこぼれ」や「不良」を量産しているからである（「第4回 教育の経済効果（その2） 3. 学校における「社会化」の隠された実体」、「第8回 能力の個人差 10. 認知的文化の差—声の文化と文字の文化」参照）。

欧米人は、「神の言葉」にしたがう「ロボットの人間」から、「理性を正しく導く方法」にしたがって「真理」や「普遍的価値」を探求し、「発見」された「真理」や「普遍的価値」にしたがう「ロボットの人間」に変わっただけであり、「束縛や従属」から解放され「自由」になったわけではない。「理性を正しく導く方法」という超越的なものの絶対性・必然性の前では人間はまったく無力である。こう言うと、「聖書」には「真理」や「普遍的価値」の内容が書かれているのに対し、「理性を正しく導く方法」には「真理」や「普遍的価値」の内容は書かれておらず、「真理」や「普遍的価値」を探求する方法が書かれているだけであるから、人間には「真理」や「普遍的価値」を探求するという主体性があるという批判があると思う。しかし、「理性を正しく導く方法」以外の方法を用いて「真理」や「普遍的価値」を探求してはならないという点で、そこには自由はない。「真理」や「普遍的価値」を探求するか、しないかを定める自由しかない。しかも、他人が「発見」したと称している「真理」や「普遍的価値」の内容に縛られ、それを否定するのは非常に困難である。山本雅男氏は『ヨーロッパ「近代」の終焉』（P.213-214）で次のように指摘している。

人びとの思考法のなかにあつて、“科学的”という名辞が人びとの思考をいかに不自由なものにしてきたかも明らかだ。“科学的”の名の下に厳密性を追求しながら、いかに多くものを排除してきたか。想像力の自由な拡張を“非科学的”の一言で抹殺することもまかり通ってきた。なによりも自由度の高い思考法は、近代科学が依存してきた線形的な因果の法則を拒否し、縦横無尽に飛翔するところから発想が始まるからだ。

そもそも「理性を正しく導く方法」や「科学的方法」が真理であることをどのようにして証明するのであろうか。「理性を正しく導く方法」や「科学的方法」が真理であることを、「理性を正しく導く方法」や「科学的方法」によって証明するというのでは循環論法になる。「神の言葉」が真理であることを「神の言葉」によって証明するという原理主

義と同じである。「権威への依存」が高ずると、「権威が言うことは全て正しい。なぜなら、権威は正しいことしか言わないから」という循環論法に陥り、権威を信仰し、権威に絶対的に服従する原理主義的な権威主義者に成り果て、権威を信仰しない者を「異常者」と決めつけ、迫害するようになる。

「理性を正しく導く方法」や「科学的方法」によって得られた結果が現実うまく適合しているので、「理性を正しく導く方法」や「科学的方法」が真理である可能性が高いと言えるという主張がなされることが多い。しかし、現実への適合性をどのような方法で判定するのかという問題が生じる。現実への適合性を判定するためには、現実を正確に知らなければならないが、どのようにすれば、現実を正確に知ることができるのか。「理性を正しく導く方法」や「科学的方法」によってか。「理性を正しく導く方法」や「科学的方法」によって得られた結果を、「理性を正しく導く方法」や「科学的方法」によって知った現実と比較することによって適合性を判定するというのでは循環論法である。この循環論法を断ち切れるものは、現実とはこういうものだという主観的な経験論、つまり、「科学者」が個人的経験に基づく印象論に過ぎないとして批判するものだけである。結局、「理性を正しく導く方法」や「科学的方法」と称されているものは、各専門分野での主観的な経験論同士の争いの結果、勝ち残った慣行（これがパラダイムの正体である）に過ぎないのであり、それが本当に理性を導いたり、真理を発見したりする方法であるかどうかは誰にも分からないのである。

脳などの神経系が行う認知（何かのものを知覚し、それがどのようなものであるかを解釈する過程）が現実（何かのものの真実の姿）からかけ離れたものであれば、その生物は生き残れないが、ほどほどの現実への適合性さえあれば生物は生き残ることができる。人間の認知の現実への適合性もその程度のものである。人間は理性を持っており、真理を発見できるなどというのは人間のおごりに過ぎない。人間は理性に近いものを持っており、真理に近いものを発見できるだけであり、遺伝的制約を乗り越えることができない限り、永遠に真理には到達できない。観測機器、コンピュータなどが人間の認知能力を補うことができるが、それらを作り、それらから観測結果等として出力されたものを知覚し、解釈するのが人間である以上、遺伝的な制約からは逃れられない。

「方法的権威」への依存によって、「人的権威」や「記号的権威」によって内容面で縛られる人間から、慣行によって方法論で縛られる人間に変わったのであるから、一応の「進歩」ではある。しかし、「理性を正しく導く方法」を実践するためには能力と労力が必要なので、変わったのは一部の人間だけである。「方法的権威」への依存は誰にでもできるのではなく、また、自分の専門分野に関して「方法的権威」へ依存できる人でも自分の専門外の分野では「方法的権威」へ依存できないので、大多数の人間は、「専門家」が「理性を正しく導く方法」によって発見したと称している「記号的権威」に依存している。また、「声の文化」に親和的なために「人的権威」に依存している人も多い。

大多数の人間は、他人の意見・理論・欲求によって心の内面で縛られていながら、その

ことを自覚していない。エーリッヒ・フロムは『自由からの逃走』で次のように指摘している。

近代人は、「自分」が考え話している大部分が、他のだれもが考え話しているような状態にあることを忘れている。また近代人は独創的に考える力、——すなわち自分自身で考える能力を獲得していないということを忘れている。(P.121-122)

人間は……自分自身をあたかも商品のように感じている。……その生産物や、その奉仕を売るためには、一つの「人格」をもっていなければならない。この人格はひとに気にいるものでなければならない。……その特殊な地位が要求するエネルギーや創意や、その他いろいろなものをもっていなければならない。商品と同じように、これらの人間の性質の価値をきめるものは、いや、まさに人間存在そのものをきめるものは、市場である。もしある人間のもっている性質が役に立たなければ、その人間は無価値である。(P.136)

権威はつねに、汝はこのことをなせ、あのことをなすべからずと命令するような個人や制度であるとはかぎらない。この種の権威は、外的権威と名づけることができるであろうが、権威は、義務、良心あるいは超自我の名のもとに、内的権威としてあらわれることもある。……中産階級の政治的勝利によって、外的権威の特権は失われ、かつての外的権威の位置に、人間の内的良心がとってかわるようになった。この変化は……自由の勝利のように思われた。……ところがよく分析してみると、……人間の良心によってあたえられる秩序の内容は、けっきょく個人的な自我の要求によってよりも、倫理的規範の威厳をよそおった社会的要求によって左右されやすいものであるということが明らかとなっている。……最近になって、「良心」の重要性は失われてきた。……しかし……権威はなくなったのではなく、むしろ目にみえなくなっただけである。……そのよそおいは、常識であり、科学であり、精神の健康であり、正常性であり、世論である。それは強制せず、おだやかに説得するようにみえる。それは自明のことだけしか要求しないようにみえる。母親は娘に「あの青年といっしょに外出するのはいやでしょう」といい、広告は「このシガレットを喫ってごらんさい、そのさわやかさはお気に召すにちがいありません」と暗示する——けっきょくわれわれの全生活をおおっているのは、これらの微妙な暗示の雰囲気である。匿名の権威は、あらわな権威よりも効果的である。というのは、ひとはそこにかれが服従することが期待されているような秩序があらうなどとは想像もしていないから。(P.184-186)

一般の新聞読者に、ある政治的問題についてのかれの考えを尋ねてみよ。かれは新聞で読んだ……記事を、「かれ」の意見として答えるであろう。しかも……かれは自分のしゃべっていることが、自分自身の思考の結果であると思こんでいる。(P.210-211)

多くのひとびとは、なにかするとき、外的な力によって明らかに強制されなにかぎり、かれの決断は自分自身の決断であり、なにかを求めるとき、求めるものは自分であ

ると確信している。しかしこれは、われわれが自分自身についてもっている一つの大きな幻想である。われわれの決断の大部分は、じっさいにはわれわれ自身のものではなく、外部からわれわれに示唆されるものである。……孤独の恐ろしさや、われわれの生命、自由、安楽に対する、より直接的な脅威にかりたてられて、他人の期待に歩調を合わせているのにすぎない。(P.218)

教育のそもそもの発端から、独創的な思考は阻害され、既製品の思想がひとつひとつの頭にもたらされる。……私はこんにち用いられている教育方法で、じっさいには独創的な思考を妨害しているいくつかのものを、簡単にあげてみよう。その一つは、事実についての知識の強調、あるいはむしろ情報の強調というべきものである。より多くの事実を知れば知るほど、真実の知識に到達するという悲しむべき迷信がひろまっている。……たしかに、事実についての知識のない思考は、空虚で架空である。しかし「情報」だけでは、情報のないのと同じように、思考にとっては障害となる。……もう一つの方法は、……すべての真理を相対的なものとみなすことである。……科学的な探求は主観的な要素から離れなければならず、感情や関心をぬきにして世界をながめることが科学の目標である。……経験主義、実証主義という名のもとにしばしばあらわれ、あるいは言葉の正確な使用をめざすのだといって自慢している相対主義の結果は、思考がその本質的な刺激——すなわち考える人間の願望と関心——を失うことである。そのかわりに、それは「事実」を登録する機械となる。(P.272-274)

問題があまりに複雑で普通の個人には把握できないという主張がある。事実はその反対に個人生活、社会生活の根本問題は、たいてい非常に単純であり、だれもがそれを理解することを期待できるように思われる。「専門家」だけが、しかもかれの限られた領域においてだけ理解できるというようにみせかけることは、……本当に問題となっていることがらにたいする、自分の思考能力の自信を失わせることになる。……このような影響は二重の結果をもっている。すなわち、一つは聞くこと読むことすべてにたいする懐疑主義とシニシズムであり、他は権威をもって話されることはなんでも子どものように信じてしまうことである。その本質的な結果は、かれが自分自身の思考や決断をおこなう勇気を失わせることである。批判的な思考能力を麻痺させるもう一つの方法は、世界について構成された像をすべて破壊することである。……生活はあらゆる構成を失うのである。それは多くの小さな断片から作られ、それぞれたがいに分離し、全体としての感覚はみじんもみられない。個人は……積木をもった子どものように、これらの断片ももってひとりぼっちにされている。しかしちがっているのは、子どもは家とはどんなものであるか知っており、……小さな断片にも家の諸部分を見つけだすことができるのに反し、大人はその「断片」を手にしなから、「全体」の意味がわからないのである。

(P.277-278)

われわれはみずから意思する個人であるというまぼろしのもとに生きる自動人形となっている。(P.279)

人間の圧倒的多数派は自由にはなろうとせず、権威や多数派に縛られる「ロボットの人間」として生きることを望む生き物である。それは、自分を脅かす強大な敵から身を守る（あるいは、安心感を得る）ために、自分で情報を集め、考え、決断し、行動し、その結果に責任を持つという困難で面倒な作業から逃げて、権威に依存する（あるいは、多数派に同調する）ことによって身を守る（あるいは、安心感を得る）という安易な道を選び、自由から逃走しているからである。短期的で狭い視野には、それが自分の利益を極大化する行動だと思えるのである。また、人生の目的は自分の遺伝子を残すこと以外にはなく、人間は死ぬために生きているという冷徹な現実を直視することを避け、権威が与えてくれる生きがいや死後の世界での救いという幻想にすがり、自由から逃走しているのである。さらに、専門分野の「細分化」が進み、世界の全体像を把握することが困難な状況で、世界のどこをどのように変えれば自分たちが救われるのか分からないと感じている人々は、世界の全体像に関する単純明快な説明を与え、全ての問題を解決してくれる改革の方法を示してくれる全知全能の救世主を渴望し、自由から逃走しているのである。自由から逃走した人々は、「権威への依存」という「バカの壁」の中に閉じこもるか、「多数派への同調」という「粘土製の繭」（「第 13 回 日本の特殊性と教育 3. 「空気」の支配」参照）に包みこまれるかして、外の世界が見えなくなり、外には別の世界があるということが分からなくなる。つまり、原理主義的な一元論に陥る。養老孟司氏は『バカの壁』で次のように指摘している。

原理主義が育つ土壌というものがあります。……一元論のほうが楽で、思考停止状況が一番気持ちいいから。……私は……人生は崖登りだと思っています。崖登りは苦しいけれど、一歩上がれば視界がそれだけ開ける。……手を離したら千仞の谷底にまっ逆さまです。……原理主義に身をゆだねるのは手を離すことに相当する。谷底にまっ逆さまだけれど、それは離れている人から見ての状態で、本人は、落ちて気持ちがいい。……「まっ逆さま」に転落している状態の代表例が、カルト宗教に身をゆだねているということです。……物を考えるということは決して楽なことじゃない……多くの学生が、考えることについて楽をしたいと思っているのであれば、そこには……どうしようもない壁がある。……知ることによって世界の見方が変わる、ということがわからなくなってきた。（P.198-201）

安易に「わかる」、「話せばわかる」、「絶対の真実がある」などと思ってしまう姿勢、そこから一元論に落ちていくのは、すぐです。一元論にはまれば、強固な壁の中に住むことになります。それは一見、楽なことです。しかし向こう側のこと、自分と違う立場のことは見えなくなる。（P.204）

「自由からの逃走」が、権威者・権力者、組織、宗教、慣行・慣習、道徳、常識、世論、

思想、科学的方法・理論、教育、神話・物語・小説・映画・漫画、マスコミ、広告などによる人間の思考と行動の支配を生み出してきた。いつの時代においても、圧倒的多数派は「自由からの逃走」という安逸な生き方を選び、自ら進んで「ロボットの人間」や「擬似ロボット」になり、「ロボットの人間」や「擬似ロボット」になろうとしない「自由を求める創造的な人間」を迫害し続け、たまに必要になった時だけ持ち上げてきたのであり、これからも、それは続く。なぜなら、「自由を求める創造的な人間」は「情報の複製」の容易化・高速化・正確化を妨害する邪魔な存在であると同時に、複製の元になる「情報の創造」を行う必要な存在でもあるからである。「暗黒の情報社会」は「自由を求める創造的な人間」が主導権を握れるチャンスであるが、自由から逃走する圧倒的多数派はそのようなことを許さず、「暗黒の文化革命」、復古革命、あるいは宗教戦争が起こり、「自由を求める創造的な人間」への迫害は続くであろう（「13.暗黒の文化革命、復古革命、宗教戦争」参照）。

9. 互恵性（互酬性）

人間の行動を予測可能なものにする方法には「記号的権威システム」「方法的権威システム」以外に、「契約システム」がある。「契約」とは、「互恵性」から互助的要素や信頼関係形成的要素を取り除き、「贈与」と「返礼」の内容を明確化したものである。

「互恵性（reciprocity）」（reciprocity は心理学では「互恵性」、文化人類学、経済人類学、社会学では「互酬」「互酬性」と訳されることが多い）とは、相手との関係が持続する状況において、相手から受けた利益に対して、自分も同じような利益を返すという規範、要するに、ギブ・アンド・テイク（give-and-take）であり、人類に普遍的に見られる。社会生物学者ロバート・トリヴァースは、自分が損をして他の個体に利益を与える利他行動は、将来、利他行動をした相手から同様の利益を受けることができれば、その損失を解消でき、この関係が持続すると双方の利益になるので、互恵的利他行動をとるように動物は進化したと指摘している。

「互恵性」の一つのあらわれとして「贈与交換」（社会的交換）がある。「贈与交換」は、近代化以前の血縁、地縁による共同体内において盛んに行われていたものであり、贈与と返礼を相互に繰り返すことである。例えば、余剰を持つ者は不足する者に贈与する、それが美德である、しかし、不足する者が余剰を持つようになった時には返礼しなければならない、返礼しないと劣位な立場にたたされてしまう。共同体内において、食糧不足の時に食糧を分け合い、皆が飢えないようにする、多数の労力を必要とする作業で相互に協力し合う、だれかが病気になった時に助け合うなどの互助的機能を果たしていた。また、共同体の成員同士の信頼関係形成の手段としての意味も大きい。信頼関係の本質は、相手に対して「互恵的」に振る舞うであろうと信じることであり、「贈与交換」の維持は「互恵的」に振る舞っていることの証になるからである。贈与することは相手を信頼しているということ（「互恵性」にしたがって、必ず返礼する人間であると信じているということ）

を相手に示すことであり、返礼することは自分が信頼に値する人間であること（「互惠性」にしたがって、必ず返礼する人間であること）を相手に示すことなのである。

「贈与交換」と市場取引（経済的交換）とは違う。「贈与交換」では、等価性や交換時期の明示は要求されず、両者が「贈与交換」を行うという慣行・慣習や暗黙の了解の下に、慣行・慣習に基づいて十分な返礼であると認められる程度のことを、慣行・慣習にしたがった時にすれば良い。

「贈与交換」は慣習・慣行に縛られるとは言っても、その縛られ方は緩やかであり、「贈与」と「返礼」の内容や時期は、両当事者の恣意に左右される面が大きく、予測困難である。また、慣行・慣習が違う者との間では「贈与交換」は困難である。これらの困難をなくし、予測可能性を実現するものが「契約システム」である。

「契約システム」を用いて長期継続的な関係、特に長期継続的な組織を作るときに問題が生じる。契約締結時の状況は時の経過とともに変化し、予測しがたい事態が生じることもあるのに、「贈与」と「返礼」の内容が固定したままでは、不都合が生じる。状況の変化がある度に、再交渉して契約を改定するというのでは面倒であり、不安定でもある。そこで、「贈与」と「返礼」の大枠だけを定め、詳細は当事者の信頼関係に委ねるという「準拠枠設定システム」を使うことになる。山本七平氏は『日本人と組織』（P.83-86）で、このような「契約枠の設定」「枠内への組み入れ」という考え方は日本特有のものであると指摘しているが、欧米社会にも「契約枠の設定」「枠内への組み入れ」という考え方がある。封建制度と雇用契約である。日本の特殊性は、契約で詳細を定めることを嫌い、何でもかんでも「準拠枠の設定」にしてしまうことにあり、欧米の特殊性は、「準拠枠の設定」を契約だと誤解していることにある。ただし、日本には「準拠枠」を広くしようとする傾向があり、欧米には「準拠枠」を狭くしようとする傾向がある。濱口桂一郎氏は『新しい労働社会』（P.2-4）で次のように指摘している。

売買や賃貸借とは異なり、雇用契約はモノではなくヒトの行動が目的ですから、そう細かにすべてをあらかじめ決めることもできません。ある程度は労働者の主体性に任せるところが出てきます。これはどの社会でも存在する雇用契約の不確定性です。しかし、どういう種類の労働を行うか、例えば旋盤を操作するか、会計帳簿をつけるか、自動車を販売するといったことについては、雇用契約でその内容を明確に定めて、その範囲内の労働についてのみ労働者は義務を負うし、使用者は権利を持つというのが、世界的に通常の見方です。こういう特定された労働の種類のことを職務（ジョブ）といいます。……これに対して、日本型雇用システムの特徴は、職務という概念が希薄なことにあります。……日本型雇用システムでは、その企業の中の労働を職務ごとに切り出さずに、一括して雇用契約の目的にするのです。労働者は企業の中のすべての労働に従事する義務がありますし、使用者はそれを要求する権利を持ちます。……こういう雇用契約の法的性格は、一種の地位設定契約あるいはメンバーシップ契約と考えることができ

ます。

「準拋枠設定システム」における信頼関係の正体は、個別場面での互恵性の維持であり、そのためには、どのような場合に互恵性あると考えるのか（どのような利益を受けたことに対して、どのような利益を返すことが必要であるのか）に関する価値観、あるいは、慣行・慣習の一致（「標準規格化」）が必要である。

封建制度は中世ヨーロッパと平安時代後半から安土桃山時代までの日本に見られる（私は江戸時代の幕藩体制は「拡大イエシステム」（「第13回日本の特殊性と教育 1.イエとムラ」参照）が混入して形骸化した封建制度であると考えている）。中国にも封建制度があったという指摘もあると思うが、中国の封建制度は血縁原理に基づく本家と分家の関係による組織化（宗族制度）であり、封建制度とは言えないと考える。ヨーロッパと日本の封建制度は、血縁原理によらない組織化を志向するところに特色がある（ただし、「武士団」内は血縁原理に頼っていた。「第13回日本の特殊性と教育 1.イエとムラ」参照）。封建制度では、主君（日本では、「武士団」の棟梁）が諸侯（日本では、「武士団」）の領地の安全を保障する（主君が諸侯に領地の支配権を与えるという形式をとる場合が多い）代わりに、諸侯は主君に軍役等を提供する。軍役の内容は、ヨーロッパでは日数等で、日本では動員人数等で大枠を定めていたが、どのような戦争になるかは事前には分からないので、軍役の内容には不明確な面が残る。戦闘の際、主君（棟梁）の指揮権に服するし、最悪の場合、敵に殺されることもある。領地の安全の保障はもっと不明確である。敵の戦闘能力や主君（棟梁）と諸侯（武士団）の戦闘能力に左右される。そのため、相互の信頼関係や慣行・慣習による支えがなければ維持できないシステムである。なお、忠誠心も必要であるという指摘もあると思うが、封建制度における忠誠心の正体は、「互恵性」を維持する関係、つまり、信頼関係に過ぎない。主君（棟梁）の「領地の安全の保障」という「贈与」に対して、服従という「返礼」を返しているに過ぎない。端的に言うと、服従を買っているのである。したがって、主君（棟梁）に「領地の安全の保障」をする能力がないと分かると、忠誠心はなくなる。実際、主君（棟梁）と諸侯（武士団）の関係は不安定であり、何人もの主君（棟梁）の下を渡り歩く諸侯（武士団）も多かった。永続的な忠誠心は「人的権威システム」でないと生まれにくい。つまり、本来の忠誠心は権威ある人間に対する忠誠心であるが、「互恵性」に基づく服従という「返礼」も忠誠心であるかのように見せかければ、「返礼」が大きく見えるので、忠誠心がある振りをして、服従する対象を権威あるものであるかのように祭り上げるのである。日本の組織によく見られることである。

封建制度に近代的な契約の装いを与えたものが雇用契約である。G.M.ホジソンは『経済学とユートピア』で次のように指摘している。

生産過程は、予測できないこともある人間という行為者をともなっている。さらに、生産過程は外的世界からの不確かな衝撃や混乱を受けやすい。……労働過程が複雑であ

り、また、主要な成果をあらかじめ予測することができないので、契約の条件を省略せずにすべて書き出すことなど実際には不可能である。……雇用契約は一般に、完全または厳格な法律上の明細化より、むしろ信頼とか「ギブ・アンド・テイク」を当てにしている……強い社会的相互作用をとまなっており、文化のおよびその他の非契約的規範に著しく依存している。……雇用主との論争で労働組合員が用いることのできるもっとも攻撃的な手段の一つは、「規則どおりに労働すること〔順法闘争〕」である。……拘子定規なやり方で契約を実行し、……明文化されていない協力と善意から織りなされる文化的規範を破壊することである。……同様に、もっとも危険で潜在的に反生産的な経営戦略の一つは、雇用契約の詳細をすべて逐一文章で明確に表現しようとすることである。このようなやり方は一般に失敗するが、それはある程度までは、そうした措置によって言葉で表現し統制しようと試みる現象があまりにも複雑で予測しがたいからである。そのようなやり方はさらに、信頼と協力の基礎を掘り崩し、企業内に懲罰と怠惰が蔓延する対立的環境を作り出すことになる。……シュンペーターは、資本主義がそれ以前の封建時代から継承した忠誠や信頼といった規範に依存していることを強調した。……雇用主は、雇用契約を通じて、労働の様式や仕方を統制する権力を手に入れる。

「雇用契約の詳細をすべて逐一文章で明確に表現しようとする」試みとは「マクドナルド化」である。「マクドナルド化」が成功している事例が多いということは、G.M.ホジソンの「このようなやり方は一般に失敗する」という指摘は間違っているということである。G.M.ホジソンが間違えたのは、「マクドナルド化」が持つ意味を理解できていないからであると思われる。「マクドナルド化」によって、「情報の複製過程」に関しては、「労働過程が単純になり、また、主要な成果をあらかじめ予測することができるようになるので、契約の条件を省略せずにすべて書き出すこと」が可能となり、雇用契約は必要でなくなり、請負契約等で十分であるということになる。しかし、「情報の創造過程」の方は、「労働過程がますます複雑になり、また、成果をあらかじめ予測することが全くできないようになるので、契約の条件を書き出すこと」が不可能になってしまい、雇用契約では対処できなくなり、「情報の創造過程」の成果の売買という形をとらざるをえなくなる。つまり、「情報社会化」は、雇用契約に基づく組織の解体を招くのである。

学校への在学契約も、契約ではなく「準拠枠の設定」である。契約であるとする、校則の制定権、懲戒権、単位認定権等の法的根拠がうまく説明できず、部分社会論などの無理のある理論を用いなければならなくなる。

なお、「準拠枠設定システム」では、強者（指揮監督権を有する者など）と弱者（指揮監督に服する者など）の関係が生じやすいので、弱者を保護するための法的規制（労働基準法など）が必要である。このことは、「第13回 日本の特殊性と教育 1.イエとムラ」で述べる「擬似イエシステム」や「拡大イエシステム」でも同様である。

10. 「高速化」する生活

加速する「高速化」によって、何かに急き立てられている、忙しい、時間が足りないと感じている人が増えてきている。他人に先んじて情報を得て、素早く対応しないと、利益を得る機会を失ったり、損害を被ったりする。「情報の複製」の高速化によって溢れかえる情報を前にして、これを知っておかないとまずいのではないか、そんな楽しいことがあるならやっておかないと損だと、いろいろな事に手を出し、必要以上にあくせくする。

「高速化」の強迫観念に囚われた人々は、商品の消費のスピードを上げる。急かされたように、テレビ、雑誌、インターネット等から最新の流行の情報を集めて、最新流行の衣服、電子機器、DVD等の製品を買い、スポーツに興じ、旅行に行くのである。旅行に行っても、のんびりすることなく、あれもこれもと見て、体験して、飲んで食べて、走り回る。この消費の「高速化」が、「情報の複製」の「高速化」によって大量に生産される商品の需要を作り出し、経済成長に貢献する。

「高速化」から逃れるために、人々が取り始めた対応は2つに大別できる。一つめは、溢れかえる情報を前にして、自分の関心領域を狭く限定し、それ以外の情報には目を閉ざすことによって、つまり、「細分化」によって対応し、「バカの壁」の中で生きる人たちである。オタクが典型例であるが、自分の仕事以外のことには関心を持たない人、狭い研究分野に閉じこもる研究者など、かなりの大勢力である。この人たちは、仲間内だけで通用する情報を大量に作り出し、それらを処理しきれなくなって、さらに「細分化」ということを繰り返す道を歩み続けることになるであろう。この結果、世界は、どんどん「たこつぼ化」していく。

二つめは、スローライフ的な生き方を求める人々であり、今のところ、少数派である。スローライフと言っても、何でもかんでもスローにするわけではなく、他人からの強制を受けることなく、自分で自分の時間を管理して、自分のペースで緩急自在に生活していこうとする態度である。スローライフ的な生き方に賛同する人々は、労働時間の自己管理によって、自分のペースで質の高い仕事ができ、また、創造性を発揮できるので（急かされていては創造的な思考ができない）、労働生産性は向上すると主張している。

スローライフが地球環境問題と結びついた時、状況が一変する可能性がある。「高速に生産したものを高速に消費して高速に経済成長していくという、これまでの経済活動のあり方が、人々を過労、ストレス、そして病気に追い込み、地球環境を破壊し、資源を枯渇させている。これでは、経済成長しても、人々が豊かになったとは言えない。経済活動を人間らしいスピードに落として、地球環境との調和をはかってこそ、真の豊かさが得られる」というような思想が普及して、「情報の複製」の「高速化」にストップがかかる可能性がある。

11. 教育を高度化しても「暗黒の情報社会」には対応できない

教育を高度化して、全ての人間に「情報の創造過程」を担当する能力を持たせれば、「暗黒の情報社会」の到来に対応できるという主張があるかもしれない。「教育を高度化して、知識社会に対応する」という言説である。しかし、残念ながら、「情報の創造過程」を担当する人は少なくても良いので、全員が就くことはできない。トップレベルの少人数が創造した情報を大量に複製して、需要を満たすことができるからである。また、教育以外の環境と遺伝によって生じた個人の能力差を教育によって乗り越えるには限界がある。

「情報の創造過程」とは、現実を抽象化してマニュアル、作品、機械、理論等を作ったり、既存のマニュアル、作品、機械、理論等を変形して、より優れたマニュアル、作品、機械、理論等に作りかえたりすることである。「情報の創造過程」には、「文字の文化」の「人間の生活世界を記号によって抽象化した理論モデルを用いた」「状況依存的ではない、形式論理的な」認識と思考の方法（抽象的思考）が必要であるが、それだけでは「改良的創造性」（従来からの延長線上で改良されたものを作り出す創造性、「第5回 教育と経済成長 6.イノベーションによる経済発展」参照）しか発揮できない。抽象的思考を身につけただけでは、抽象度の高い既存のマニュアル、作品、機械、理論等を利用（現実適用）でき、その延長線上での改良ができるだけである。「飛躍的創造性」（従来のものからかけ離れたものを作り出す創造性）を発揮するためには、抽象的思考に加えて、洞察力、創造力、想像力、美的センスなどが必要であるが、例えば、ユニークな「事実の認識と思考の方法」（「第4回 教育の経済効果（その2） 4.「事実の認識と思考の方法」の改造」参照）を用いて、自然のパターンや人間の行動パターンにそれまで誰も気づかなかった特定の傾向があることを見つけ、その傾向と一見無関係な理論体系のパターンを類推適用することなどにより、その傾向を理論体系化したり、それまで無関係と思われていた知識・理論同士を結びつけたり、既存の知識・理論の結びつき方を抜本的に変えてみたりすることによって、新たなものを作ったり、解決困難とされていた問題を解決したり、それまで誰も気づかなかった問題があることを指摘したりすること（比喩的に言えば、頭が柔らかく、考え方が流動的であることが必要である）が、これらの能力は遺伝や家庭環境に左右される部分が大きく、勉強すれば誰でも身につけられるというものではない。「飛躍的創造性」を発揮するためには、幅広い分野にわたる知識が必要なので、その面では勉強して身につけられるが、それだけでは不十分である。

「暗黒の情報社会」では「能力平等観」と「努力主義」は通用しない。残念ながら、洞察力、創造力、想像力、美的センスを確実に身につけられる教育方法、学習方法は今のところない。そもそも、「第8回 能力の個人差」で述べたように、「抽象的思考」の身につけ易さには、遺伝的な差異があり、生育環境にも影響される。この問題に関して、山田昌弘氏は『新平等社会』（P.169-171）で、次のように指摘している。

ニューエコノミーでは、創造力、コミュニケーション能力や情報スキル、美的センスなどの新しい能力が必要になっており、それは幼少期に家庭で身につく……経済力

が低い親に育てられている子どもは、……学力はついてもニューエコノミーに必要な新しい能力が身につけていない可能性が高く、苦勞して学校を卒業してもそれが職業の保証にならなくなっている……

エスピン＝アンデルセンは、新しい社会において必要な「認知的能力」は、幼少期の家庭環境によって決まるという経済協力開発機構の PISA（学習到達度調査）の結果を紹介している。一つは、親が読書をしているかどうか、一つは両親がインテリジェンスな会話を交わしているかどうか、もう一つは、親がコンサートなどに連れて行っているかどうか、だという。つまり、コミュニケーションを交わし、知的かつ美的刺激のある環境に育てば、創造力や美的センスがつくが、経済的、精神的余裕がない親のもとに育てば、このような能力が身につく機会がなくなるのである。……

子どもにとっての機会均等は、このような意味で、幼少期の環境から保証しなくてはならない時代になっている。……保育園も、ただ預かるだけではなく、子どもへの知的刺激やコミュニケーション力の養成を目指したプログラムを作る必要がある。…

学校教育でも同様に、文部科学省が推進する「新しい学力」は、認知的能力を開発するという方向では正しいが、ノウハウがなく一律に行われるため個性をむしろ抑制する効果があるかもしれない。結局はインテリの親が用意するその子に合った知的環境には、かなわない。むしろ、学校は学力をつける役割に専念して、子どもの個性的能力の開発には、学校外の個別対応的な社会教育機関を活用する方が機能的かもしれない。

「ゆとり教育」のうちの「子ども中心主義の教育」の側面で唱えられた「新しい学力観」には、誰でも教育すれば、「抽象的思考」を身につけ、「改良的創造性」を發揮できるようになると考えたところに間違いがあった。新しい学力観は、特定の才能を持って生まれ、特定の家庭環境で育ち、「文字の文化」に対して親和的な子どもに対してだけ、「抽象的思考」と「改良的創造性」を伸ばす上で有効な教育方法なのである。遺伝と家庭環境により「声の文化」に対して親和的な子どもに対しては、「抽象的思考」と「改良的創造性」を伸ばす効果がないどころか、「具体的思考」を強化してしまい、学力低下を招くだけである（「第 4 回 教育の経済効果（その 2） 3. 学校における「社会化」の隠された実体」、「第 8 回 能力の個人差 12.現代の教育と産業は私たちの遺伝子構造と不適合である」参照）。志水宏吉氏が『学力を育てる』で、「知識、理解、技能」という「葉」、「思考、判断、表現」という「幹」、「意欲、関心、態度」という「根」という「学力の樹」を提唱しているが（私は、根源的な「意欲、関心」だけが「根」であり、「態度」や派生的な「意欲、関心」は「根」に含まれないと考える）、「根」は「才能の差異を増幅する本能」（「第 8 回 能力の個人差 11.才能の差異を増幅する本能」参照）に支配され、「幹」は「文字の文化」に親和的か、「声の文化」に親和的かという遺伝と家庭環境に強

く影響される。その結果、知的な活動に適した才能とそれを強化する本能を持ち、「文字の文化」に親和的な子どもは、自らの力で「知識、理解、技能」という「葉」を茂らせることができるので、教師はそれを支援するだけで良いが（教師が知識を詰め込もうとすると、「改良的創造性」の発揮に必要な「自ら学び自ら考える力」を奪うことになる）、知的な活動に適した才能とそれを強化する本能を持たず、「声の文化」に親和的な子どもは、「根」も「幹」も貧弱で、自らの力では「知識、理解、技能」という「葉」を茂らせることができないので、教師が知識を詰め込む（指導する）必要があるのである。「才能の差異を増幅する本能」に支配された根源的な「意欲、関心」という「根」を教育によって変えることができるなどという考えは、現実を無視した理想論に過ぎない。「態度」という表面的なものは「多数派への同調」によって容易に変わり、派生的な「意欲、関心」は「権威への依存」によって容易に変わるので、「根」を教育によって変えることができるという誤解を抱いたのかもしれないが、「才能の差異を増幅する本能」は遺伝子改造以外の手段によっては変えることができない。「8.権威への依存」で、人間の心が権威に支配されていると指摘したが、権威の力を持ってしても、「得意なことはやらずに、苦手なことをどンドンしなさい」という強制はできない。例えば、知的な活動に適した才能とそれを強化する本能を持たず、スポーツに適した才能とそれを強化する本能を持つ人間に、スポーツはやらずに、勉強をどンドンしなさいと強制しても無駄である。

「改良的創造性」を伸ばし、平均的な学力を向上させるためには、「文字の文化」に親和的な子どもに「子ども中心主義の教育」を行い、「声の文化」に親和的な子どもに「詰め込み教育」（知識重視の伝統的な教育）を行うという「差別と選別の教育」が必要である。差別感をなくせば平等になるという発想（「第9回 教育と格差の再生産 3. 差別感をなくせば平等になるという発想」参照）に立つ限り、全員に「子ども中心主義の教育」を行い、一部の子どもの「改良的創造性」を伸ばす代わりに、平均的な学力を低下させる（「できる子」と「できない子」への分極化、二こぶ化）か、全員に「詰め込み教育」を行い、平均的な学力を伸ばす代わりに「改良的創造性」を奪うかのどちらかの選択しかない。どちらの結果も反発を招く。だから、志水宏吉氏が『学力を育てる』（P.28-33）で指摘しているように、日本の教育は「知識重視の教育」の極と「子ども中心主義の教育」の極との間で振り子のように揺れ動いてきたのである。「暗黒の情報社会」では、一部の人間だけが「改良的創造性」（あるいは「飛躍的創造性」）と高度の知識を持っているれば良く、他の人間はどうでも良い（「勉強したくない奴は無理に勉強しなくても良い」と冷たく切り捨てる）ということになるので、全員に「子ども中心主義の教育」を行っても構わないのだが、それで、民主主義社会と言えるのか、社会の秩序を保てるのかという問題がある。

Gary A. Davis は ‘Barriers to Creativity and Creative Attitudes’（“Encyclopedia of CREATIVITY, Vol.1” 所収）で、「過去の学習の結果、我々は、慣れ親しんだ方法で物事を認知するようになり、新しい意味、関係、アイデアを見いだすことが難しくなってし

まう。……我々は皆、創造的であるように生まれてきたのに、社会への適応と教育が、創造力に富む思考や革新への、習慣や伝統に起因する障害を作り出すのである」（訳は福田）と指摘している。教育には、「権威への依存」の強要により、子どもの心を「標準規格化」し、「飛躍的創造性」を奪う働きがあるのである。また、太田肇氏は『選別主義を超えて』（P.36）で、「学校教育がそもそも現在の社会制度や支配的な価値体系を前提にし、それを尺度にして選別する以上、旧来の制度や価値を否定する創造的な人物が排除されるのはある意味で当然ともいえる。あるいは、創造的な仕事をするためには思考や行動を制約する制度の枠からはみだす必要があるのかもしれない」と指摘している。飛躍的に「創造的な仕事をするためには」、心を縛り付ける「権威への依存」から脱し、自由な心（本当の意味での「自ら学び、自ら考える力」）を取り戻し、「バカの壁」を打ち破る必要があるのである。なお、私は「我々は皆、創造的であるように生まれてきた」という主張には賛同できない。「創造的であるように生まれてきた」のは一部の人間だけであり、多くの人間は「権威への依存」や「多数派への同調」を好むように生まれてきている。「権威への依存」や「多数派への同調」を好む者が多数を占めなければ、集団・組織の秩序が維持できず、集団・組織を作って生きてきた人類は滅亡していたであろうからである。

「第4回 教育の経済効果（その2）」で述べたように、教育は、社会の秩序とコミュニケーションを維持するために、子どもの「事実の認識と思考の方法」を改造し、共通化する、つまり、「標準規格化」することを隠された目的としている。「飛躍的創造性」は、ユニークな「事実の認識と思考の方法」によって生まれるものだから、その根を断ち切ることになるのである。創造性と協調性を教育目標に掲げている学校が多いが、日本においては協調性とは同調性のことであり（「第13回 日本の特殊性と教育 3. 「空気」の支配」参照）、「飛躍的創造性」と同調性は両立できない。「改良的創造性」であれば、ある程度までの同調性と両立できるが、「飛躍的創造性」を持つ人間は他の人とは違う「事実の認識と思考の方法」を持っている、つまり、「標準規格化」されず極めて個性的だから、他人とは同調できない。Karen O'quin と Susan P. Besemer は 'Creative Products'（『Encyclopedia of CREATIVITY, Vol.1』所収）で、「創造的と評価される生徒は、他の生徒と少しだけ違わねばならず、あまりに違いすぎてはならない」（訳は福田）と指摘しているが、教育では「改良的創造性」しか評価されないということである。「飛躍的創造性」よりも「改良的創造性」の方が大衆には理解されやすいので、大衆向けのものを作り出すには必要な能力であろう。ただし、飽きられて、人気落ちるのも早い。

「飛躍的創造性」を發揮させるために教育がなすことは、できる限り多様な理論と思考方法、つまり「事実の認識と思考の方法」を教え、それを疑えと説くこと、つまり、「記号的権威」と「方法的権威」を相対化して見ることができる多元的な視点をもつことができるようにすることであるが、これは非効率な教育方法であると同時に社会の秩序を乱す可能性を持っている。そもそも、単一の理論（「記号的権威」）と思考方法（「方

法的権威)を信仰し、一元論という「バカの壁」に閉じこめられ、他の理論や思考方法があり得るといふこと、つまり多元論が理解できない教師が多様な理論と思考方法を教え、評価することなど無理である。秀才は学校で教えられる理論と思考方法を盲信するから教師から高く評価されるが、天才は学校で教えられる理論を疑い批判するから教師から嫌われる。

丹羽健夫氏は対談「「学力」をどうとらえるか」(「中央公論」編集部・中井浩一編『論争・学力崩壊』所収、P.147-150)で次のように述べている。

生徒の学習の傾向が「理解型」「納得型」の二つに分かれるように思います。「理解型」の学習の仕方は、「教室で教えられていることは全て正しい」という前提に立つ。彼らは「教科には整合性があるだろうから、今わからなくても、後でわかるようになるだろう」と、いったん問題を横に置き、先生の言うことをすべて受け入れる。……「納得型」の生徒は、その教科に整合性があるかどうかではなく、森羅万象に照らして正しいかどうかを気にする。

先生にとって、どちらの生徒がかわいいかという「理解型」。教室で勝利するのは「理解型」で、「納得型」の生徒は変な質問をするから授業にならないと言われてしまう。結果として勉強のできる子は「理解型」が多く、勉強のできない方に「納得型」が多い。だが、「納得型」の生徒に納得するまでつきあう先生がいたら、彼らはものすごい力を発揮できる。……今の東大や一橋、東工大の生徒は圧倒的に「理解型」が多い。そこにいる教師も「理解型」。「理解型」の能力はこれまでの日本の近代化の過程で重用され、今後必要だが、これからはもっと必要なのは「納得型」を発掘することです。

問題なのは、大学のほとんどの先生ご自身が「理解型」で、「納得型」を理解できないという点。

予備校には学校になじめなくて追い出された、あるいは学校を自らやめてきた子たちもいる。大検で大学入学資格をとろうという「大検クラス」というものがある。そこには割合「納得型」がよくいます。うちの予備校で……数学の教師と大検コースのある子が仲良くなって、ていねいに子どもの面倒をみた。するとその子どもがすごいひらめきをもっている。

また、尾木直樹氏は尾木直樹・森永卓郎著『教育格差の真実』(P.109-111)で次のように述べている。なお、「こだまコース」というのは習熟度別授業で成績が下のコースで、「のぞみコース」というのは成績が上のコースである。ちなみに、成績が中のコースは「ひかりコース」である。

同じ習熟度別を、一人の教師が三つとも担当するという時間割のやり方でやっている

学校があるんですね。そうすると、その教師に言わせると、最も質の高い学習ができているのは一番落ちこぼれのこだまコースだと言うんですよ。つまり、例えば、時間と距離の関係の学習だとか、小学校5年ぐらいでやりますね。そうすると、のぞみコースの子は公式が頭に入っていますから、瞬時にして、それこそ1秒そこそこで答えがでちゃうわけですよ。ところが、こだまコースの子は、「先生、そんなこと言ったって、その道はひよっとしたら砂利道かもわかんないし、つるつる滑ってなかなか進まないかもわからない。坂道だったらもっと時間がかかる」とかね。つまり、自分の生活体験、生きてきたわずかの10年程度の体験をフル動員しながら一生懸命に考えるわけですよ。そして、それを突きつけられると、教師のほうも「なるほど」と思っちゃったと言うんです。そういう発想をする子の姿を、実はのぞみコースの子に見せたいと言うんですよ。「あんたたち、それに答えられるのか」というのはすごく重要な課題で、だから学習の質は、こだまコースが最も高いと。……「では、尾木君、得意がって数学が100点だと胸を張るのなら、あなた、こだまの子の疑問を説明してごらん」とか何かと言われて、ハタと困って、そして一生懸命考えて答えることによって、できる子はまた深まっていくなわけですよ。

また、斉藤孝氏は対談「現場発、総合学習はこんなに面白い！」（中井浩一編『論争・学力崩壊 2003』所収、P.215）で次のように述べている。なお、「種」というのは、小学3年生で1年間、「種の不思議物語」というテーマで行われた総合学習で、教師が種の蒔き方・育て方を一切教えず、コンピュータ・辞典の類も一切使わずに、先ず、いろいろな種に触れさせ、臭いをかがせ、食べさせた後、子どもたち自身の考えにしたがって、種を蒔き、育てさせ、その結果を絵巻物にして発表するというものである。

現実の方が意味が多いわけですね。活字の説明では、多くの切り取りがなされてしまっているけれども、現実の「種」は種類によっても違うし、一個一個も違う。含まれている意味の量がそもそも多い。それに比べていままでの教科書は、きわめて意味の含有率が低い。少なくとも子どもが意味を自分で取りだしてくる素材にはなっていない。「教科書」というか、まとめのようなものがあっていいけれども、そこに行くまでの、自分で現実から意味を取り出してくる能力がいちばん大事ですね。「種」……は、言語化されていないもので、そのポイントは何かを、たとえば箇条書きにするなどのやり方を通して、暗黙的な知を一度意識化して形式的な知に戻させると、「ああ、自分は見えていなかったんだ」とわかりますね。……クラスには不思議と見えるやつがいるものです。そういう能力が、これからの非常にハードな社会でいっそう必要な力になると思います。

私は、「理解型」は、既存の理論・知識体系がどのような現実を抽象化したものであるかが一応分かり、理論・知識体系を利用して現実がどのように変化するかを予測でき（演

繹的推論)、現実を一定方向に向かわせるように操作でき、「改良的創造性」を発揮して、既存の理論・知識体系の延長線上の修正(既存の理論・知識体系を前提にして、その方法論にしたがって、体系に何かを付け加えていく修正、つまり、既存のパラダイム内での修正)ができる「一応理解型」(いわゆる「新学力観」、「PISA 型学力」がこれに当たる)と、既存の理論・知識体系がどのような現実を抽象化したものであるかが良く分かっていない(表面的な理解に止まる)ので、理論・知識体系を利用して現実がどのように変化するかを予測できなかつたり、現実を一定方向に向かわせるように操作できなかつたりする「表面理解型」(いわゆる「旧学力観」がこれに当たる)の2つに分かれると考える。「納得型」は「抽象的思考」か「具体的思考」かによって2つに分かれ、「抽象的思考+納得型」は、「飛躍的創造性」を発揮して、現実を抽象化して新しい理論・知識体系を作ったり(「現実から意味を取り出してくる」、「暗黙的な知を一度意識化して形式的な知に戻す、帰納的推論やアブダクションを用いて新たなパラダイムを作る)、既存の理論・知識体系を大幅に変形して、より優れた理論・知識体系に作りかえたり(既存のパラダイムを変革する)できる生徒(「不思議と見えるやつ」)であり、「具体的思考+納得型」は学校で習う算数・数学は現実離れたパズルのようなものであると感じ、社会科・地歴で今の生活に関係のない昔の話を聞いても意味がない、何の役に立つのかと疑問を抱き、理科で運動の法則を勉強しなくても、物がどう動くかは見ていれば分かる、運動の法則が分かるとサッカーが上手くなるのかと思ひ、何も考えずに、上手な人のまねをしてサッカーの練習をする生徒であると考え。

言い換えれば、「一応理解型」は「記号的権威」「方法的権威」に依存し、「真理の多くはすでに発見されており、学問に体系化されている、既存の学問の方法論にしたがえば、未発見の真理もいつかは発見される」と考える生徒であり、「表面理解型」は「方法的権威」が理解できずに「記号的権威」に依存し、「真理は専門家が発見するもので、自分が発見するものではない。発見された真理は教科書に書かれているので、それを丸暗記すれば良い」と考える生徒であり、「抽象的思考+納得型」は「記号的権威」と「方法的権威」に疑いを持ち、「既存の学問体系が真理を示しているのか疑問である、既存の学問の方法論にも疑問がある、自分の頭で方法論を考え、真理を探究しよう」と考える生徒であり、「具体的思考+納得型」は「記号的権威」に反抗し、「教科書に何が書いてあるうと関係ない。理屈よりも実践だ。優れた実践を示す人が行っていることが最適な行動なので、そのまねをすれば良い」と考えているが、気付かないうちに「最適な行動はすでに発見されており、慣行・慣習に制度化されている」という方針にしたがっている、つまり、「人的権威」に依存している生徒である(「7.人間と自然の「標準規格化」参照)。彼らは、慣行・慣習に縛られた人にしたがうことによって、慣行・慣習に縛られるのである。なお、「具体的思考+納得型」の生徒が優れた実践であると考えるのは、スポーツ、職人技など、体を動かすことに優れた実践である。体を動かすことに優れた能力を持っている人を尊敬するというのは「声の文化」の特徴である(「第9回 教育と格差の再生産 3.環

境の違い→努力差→教育格差」参照)。

「一応理解型」が自ら考える(「理性を正しく導く方法」に機械的にしたがって、既存の理論・知識体系を解釈して現実に適用し、操作したり、「真理と呼ばれるもの」を発見しようとしていたりしているだけであり、本当の意味で自ら考えているとは言えないと私は思うが、一般には自ら考えていると言われる)秀才になる可能性を持った生徒であり、「表面理解型」は試験だけの秀才(仕事では使い物にならない)になる可能性を持った生徒であり、「抽象的思考+納得型」が天才か変人(下手をすると「異常者」扱いされる)になる可能性を持った生徒であり、「具体的思考+納得型」が落ちこぼれか不良になる可能性を持った生徒である。

「時間と距離の関係」の公式は、舗装された道でもない、砂利道でもない、つるつる滑る道でもない、坂道でもない、抽象化された道を、自動車でもない、自転車でもない、人間でもない、抽象化された物が移動する関係の公式、つまり、抽象的思考の産物である。「現実の方が意味が多く」、「教科書は、きわめて意味の含有率が低い」のである。したがって、抽象的思考ができないと「時間と距離の関係」の公式、そして、教科書を理解できない。「具体的思考+納得型」は、具体的にどのような道をどのような物が移動する関係の公式なのだと疑問に持ち、前へ進めない。舗装された平坦な道路を自動車が行っているというような具体的な場面ではしか考えることができないのである。「抽象的思考+納得型」は、「時間と距離の関係」の公式が抽象化された道を抽象化された物が移動する関係の公式であることは理解できるが、抽象化された際に捨て去った要素の影響が気になる。例えば、自動車の場合には、舗装された道を走る場合と、砂利道を走る場合ではスピードに大きな差がでるが、人間の場合にはあまり差が出ないとか、滑る道の摩擦の影響はどうかとか、坂道の傾斜角の影響はどうかとか。そのような疑問を抱くことによって、新しい公式を作り出す可能性が生まれてくる。「一応理解型」は、「時間と距離の関係」の公式が抽象化された道を抽象化された物が移動する関係の公式であることを理解して、正しいものとして鵜呑みにし、抽象化された際に捨て去った要素の影響を過小評価する。そのため、現実との不適合を是正する新しい公式を作り出そうという気など起こさず、既存の公式に何か(摩擦法則など)を付け加えれば十分だと考える。

太田肇氏は『選別主義を超えて』(P.204)で「私たちは、決められた枠のなかで物事を考える習慣がある。とくに「優等生」といわれる人たちほど、その傾向が強い。おそらく、長年の受験勉強や模範的社員としての振る舞いとおして、与えられた条件の中で最適解を探る思考パターンが身についたのだろう。大企業や役所の幹部候補生を対象にしたセミナーなどで、私が強く感じるのは、彼らが決して既存の枠組みを疑わないことである。そして、その枠組みがうまく機能しなくなったときには、枠組みを取り払うのではなく、より細かな枠組みを用意しようとする。こうした思考方式によって、パーキンソンの法則どおり制度はますます複雑になっていくのである」と指摘しているが、この「優等生」こそが「合理性の鉄の檻」、「バカの壁」、既存のパラダイムに閉じこめられた(比喩的に言え

ば、頭が硬く、考え方が固定的な)「一応理解型」の典型である。「形式合理性」を信じているから、「最適な手段はすでに発見されており、既存の枠組みのなかに制度化されている」と考え、その枠組み(パラダイム)がうまく機能しないのは、枠組みの理念が間違っているからではなく、例外的な事象が介入したためであるから、その例外的な事象に対応する細かな枠組みを付け加えれば良いと考えるのである。悪いことに、制度がますます複雑になることは「優等生」の利益になる。複雑な制度を理解し、運用できるのは「優等生」だけだからである。学校で教えられている学問も同様である。「抽象的思考+納得型」が創り出し、単純明快だった原型に、「一応理解型」がごちゃごちゃと付け足して、複雑難解なものになっていく。「一応理解型」は、下手をすると、抽象化された際に捨て去った要素が見えなくなったり、世界は理論どおりにあるべきで、理論に従わない世界は間違っていると考えたりする権威主義の権化、一元論的な原理主義者となる。新古典派経済学を盲信したり、資本論をバイブルとして崇めたりする経済学者は「一応理解型」の典型であろう。彼・彼女らは自分たちのことを理論という真理の追究者であると思っているのだろうが、実際には理論体系という「抽象的マニュアル」の奴隷であり、「バカの壁」の中だけが世界の全てであると誤解し、理論体系の精緻化という機械的作業をして一生を送る運命にある。

「あなた、こだまの子の疑問を説明してごらん」とか何かと言われて、ハタと困って、そして一生懸命考えて答えることによって、できる子はまた深まっていく」というのは「抽象的思考+納得型」に当てはまることであり、「一応理解型」や「表面理解型」には当てはまらない。「こだまコース」の子の多くは疑問を持つだけで前へ進めない「具体的思考+納得型」であり、「抽象的思考+納得型」は少数しかいないであろう。「のぞみコース」の子の多くは疑問を抱かず鵜呑みにする「一応理解型」か「表面理解型」であり、疑問を抱いていないふりをしている「抽象的思考+納得型」も少数いるであろう。

教育によって秀才(抽象度の高い既存のマニュアル、作品、機械、理論等を利用し、その延長線上の修正ができるだけの人)を作ることはできても、天才(現実を抽象化してマニュアル、作品、機械、理論等を作ったり、既存のマニュアル、作品、機械、理論等を大幅に変形して、より優れたマニュアル、作品、機械、理論等に作りかえたりできる人)を作ることはできない。天才は「自ら学び、自ら考える」ことによって、既存の教育とその背後にある既存の学問を批判する者、つまり、「記号的権威」や「人的権威」に依存しない者である。また、集団の一体感を強調する「擬似イエシステム」や「拡大イエシステム」(第13回 日本の特殊性と教育 「3.「空気」の支配」参照)においては、「飛躍的創造性」を持つ人間は、変なことを言い出して集団の一体感を壊す、つまり、「多数派への同調」を拒否する者、「空気」を読まない人間として、いじめられ、村八分にされるのが落ちである。日本においては、学校も「擬似イエシステム」や「拡大イエシステム」の影響下にある。

さらに言えば、洞察力、創造力、想像力、美的センスを確実に身につけられる教育方

法、学習方法が開発できたとしても、それは救いにはならない。洞察力、創造力、想像力、美的センスにもランクがあり、トップランクでなければ相手にされないからである。中途半端なレベルにとどまれば、洞察力、創造力、想像力、美的センスを身につけるためにしてきた努力は報われない。教育投資が無駄になる可能性が高くなり、リスク化するのである。

なお、洞察力、創造力、想像力、美的センスの神秘が徹底的に分析され、マニュアル化される可能性は否定できない。そうすると、全ての人間がロボットのようになるか、人間がいなくなる。創造工場で人間がマニュアル通りに働くか、人工知能が「情報の創造過程」を担当するということである。これは「方法的権威システム」の究極の姿であり、行き詰まりでもある。

12. 「暗黒の情報社会」に覆われない領域

山田昌弘氏は『希望格差社会』（P.113）で次のように述べている。

いま伸びているのが、ライシュやホックシールドの言うケア労働や感情労働、癒しといった部類の、一対一かつ個別的対応個性が要求されるサービス業である。具体的には看護師、介護士、保母、エステティック、マッサージなどの労働者である。この分野は、サービスの受け手も与え手もほぼ一対一に近く、規模による効率化になじまないため、一定割合は社会にとって必ず必要とされる労働者である（ライシュ『勝者の代償』参照）。ただ、一定の技能の習熟の後には、年功による収入増大という道も多くは閉ざされている。そして、この種の職には、ジェンダー格差があり、サービスの与え手として女性が望まれるという特徴がある。

世界に存在する情報の全てを言語などの記号に変換することはできない。世界の姿を記号によって、正確に表現しようとする、複雑かつ膨大なものか抽象的で難解なものになってしまうが、どこまでやっても、世界の姿を記号によって正確に表現することなどできないのである。また、人間は規則（明文化されたマニュアル）や慣行・慣習（明文化されていないマニュアル）に縛られ、「標準規格化」された行動をとることが多いため、人間行動をある程度は予想でき、マニュアル化できるが、規則や慣行・慣習に反する予想外の行動をとられると、マニュアルでは対応困難となる。つまり、完全なマニュアルを作ることにはできない。そのため、マニュアルで人間の行動を律しようとする、人間の行動が規格化され、まるでロボットの行動のような人間味に欠けた不自然なものになってしまう。杓子定規で冷たい役人の対応や、ファストフードの店員の不自然な接客である。そのため、仕事をマニュアル化すると不自然になったり、予想外の行動への対応が重要な仕事（教育、福祉のように人間的な触れ合いが重要なサービス業など）は残り続けるであろう。しかし、コストとの兼ね合いの問題もあり、不自然な接客であっても安ければ良いという層と高価

でも人間的な接客を求める層に分離するため、大きな需要は期待できないと思われる。また、生まれた時から不自然な接客にさらされていけば、それに不自然さを感じなくなる。そもそも、人間的な触れ合いにおいて、それをうまくこなせる人とこなせない人との能力差があるのではないだろうか。「消費者に触れる対人職業が隆盛を見せ」ても、それに対応できない人もいる。

世界の姿を記号によって、正確に表現しようとする、複雑かつ膨大なものか、抽象的で難解なものになってしまうことを積極的に利用して、自分たちの地位を保っている人たちがいる。専門職や経営者である。仕事に必要な知識（マニュアル）が複雑、膨大、抽象的、難解なものであれば、それをものにする人可以限られてくる。例えば、法律は、人間の行動を律するものなので、人間の行動パターンを正確に法文で表現できることが前提になる。しかし、人間の行動パターンは極めて多様であり、事細かに法文で表現していると、とんでもない数の条文になってしまう。そこで、人間の行動パターンをいくつかの類型に分け（つまり抽象化して「標準規格化」し）、それを素人には分からない独特の用語で表現するというを行う（日常用語の意味にはあいまいな部分があり、厳密な表現ができないからである）。この人間の行動パターンの類型化（「標準規格化」）には無理があり、どうしても、素直に類型（「標準規格」）に当てはまらない行動パターンが出てきてしまう。その場合でも裁判を拒否できないので、また、法律で行動パターンを正確に表現できるという立前を守るために、さらには社会通念に反する判決を避けるために、類推解釈、拡張解釈、利益衡量などの無理な解釈（無理な解釈ではないというのが多数説であるが、私は、価値判断が先行して後からもっともらしい理由付けを行う恣意的な解釈であると考えている）を行うことになってしまう。この結果、抽象的で意味不明の法律を秘法（類推解釈等）を用いて解釈している法律家というイメージが作られ、法律家の地位が守られるのである。したがって、仕事をいくつかの部分に分け、それに必要な知識を徹底的に分析して、単純、具体的、明快なマニュアルを作ることができれば、専門職・経営者の地位は低下する。もちろん、これは容易な作業ではないし、専門職・経営者の激しい抵抗にもあうであろう。

山田昌弘氏は『新平等社会』（P.177-178）で次のように述べている。

最近、ソーシャル・キャピタル（社会関係資本）への注目が集まっている。ロバート・パットナムらは、職場、親族、宗教組織、趣味のサークルなど、人々がもっている人間関係が、社会生活にとって不可欠であると主張している。私なりに「希望」の観点から解釈すれば、社会関係資本とは、自分の努力をきちんと評価してくれる関係性とも言える。……いわゆる「オタク」と呼ばれる集団は、オタクという内部で、特殊なキャラクター等の収集や知識の蓄積という「努力」をお互いに評価し合う集団である。努力してその集団の中で評価されることが「希望」をもたらすのだ。その中で、努力に対する信頼や美的センスを磨けば、現実の仕事で役に立つ可能性もある。……その人の個性にあ

ったコミュニティを作ること、生活の場での希望をとりもどすきっかけになる。

その人の個性にあったコミュニティ、集団内でお互いに評価し合い、価値を認め合うことで、希望を取り戻すということは、一見、すばらしいことのように思えるが、そこには、贈与交換（「9. 互惠性（互酬性）」参照）が支配していることに注意する必要がある。

文化人類学は、「贈与交換」のもとでは、数多く贈与できる者と返礼が十分にできない者の間には支配・服従の関係が生まれる場合があることを明らかにしている。服従することで返礼するわけである。個性にあったコミュニティにおいても、その個性において高い能力を持つ者は多くのものをコミュニティに提供できるので支配者になり、その個性において低い能力しか持たない者はコミュニティに提供できるものがほとんどない（返礼が十分にできないということ）ので服従者になる可能性がある。荻谷剛彦氏が『大衆教育社会のゆくえ』（P.211）で指摘しているように、「個性を重視するといっても、すべての個性に価値が与えられるわけではない。……個性もまた、不平等に存在している可能性がある」。例えば、オタク集団の中で、「特殊なキャラクター等の収集や知識の蓄積」が多い者が評価され、蓄積が少ない者はばかにされるといようなことが起こる。服従を強いられ、ばかにされた者は、そのコミュニティ、集団に不満を持ち、脱退して、新たなコミュニティ、集団を作るかもしれない。その結果、社会は閉鎖的な小集団に分裂し、相互の意思疎通が困難になる。これは、狭い専門分野に分かれた科学者が、専門分野の違う科学者との間での情報交換が困難になっているのと同じ状況である。閉鎖的な小集団内の価値基準に従い、いくら努力して、成果を出しても、それは、集団外の人には理解困難なものになってしまうので、「現実の仕事で役に立つ可能性」はあまりない。そもそも、どのような個性においても、能力が低いという人がいるかもしれない。そのような人には、属すべきコミュニティ、集団がない。

13. 暗黒の文化革命、復古革命、宗教戦争

山田昌弘氏は『希望格差社会』で次のように述べている。

前近代社会では、……貧しい親のもとに生まれたものは、一生苦勞がつきまとい、豊かな親のもとに生まれたものは、一生快適な生活が約束される社会であった。そのような条件の下で、宗教が、「努力が報われるという信念体系」を作り出していた。現世で行った努力は、死語、来世で報われるというシステムである。……このシステムは、貧しく生まれたものには希望を与えるだけでなく、豊かに生まれたものに節制という効果をもたらした。……宗教改革によって、前近代社会の希望観が根本的に覆される。ルターは、……仕事に勤勉に励むことは、……神の心に叶うことであるとした。……カルヴァンの教義では、……救われる人と救われない人は、生まれたときには決まっている……勤勉で社会的に成功する人は、生まれながらに救われる人であり、享

樂的で失敗する人は、生まれながらに救われない人である。これは、現世での社会的成功が来世の救いの「証拠」であるという意識をもたらす。……宗教の統制力が衰え、カルヴィニズムから「来世の救い」の部分が抜け落ちると、マックス・ウェーバーが言うように、「資本主義の精神」……となる。それは、現世で「社会的に成功する」ことが、努力の報いになるという教義である。すると、希望は、「現世」に求めなければならない。……資本主義社会では、「たとえ、貧しいものでも、努力さえすれば、金持ちになれる」という物語が必要となっている。……しかし、実際には、努力してもなかなか報われないという現実がある。特に、貧しい親の元に生まれた人、それほど能力がない人は、「努力しても」、なかなか豊かな暮らしには到達できない。そこで出てきたのが、マルクス主義に代表される革命思想である。貧しい労働者が団結し、生まれながらの金持ちである資本家たちと闘争していけば、将来の時点で革命が起こり、労働者が最も豊かな生活ができる時期が来ることを約束する思想である。……1990年前後の社会主義国の体制崩壊によって、貧しく生まれた人の「合理的」宗教が崩壊したといえなくもない。すると、来世に希望を求めざるを得なくなり、その結果、過激なイスラム教やキリスト教のファンダメンタリズム、そして、オウム真理教のような過激な新宗教に惹かれる人々が出てくる。(P.195-198)

ライシュによって「ネオ・ラッドライト（機械打ち壊し）運動」と名付けられた考え方も出てきた。それは、旧来のシステムを懐かしみ、新しい社会をもたらすものを排除しようとする動きである。これは、日本では、規制緩和や構造改革への反対論、慎重論として、高度成長期の安心社会の復活を目指そうとするものである。(P.232)

日本では「マコト主義」（「第13回 日本の特殊性と教育 4.マコト主義信仰」参照）が、アメリカではアメリカン・ドリームが、「たとえ、貧しいものでも、努力さえすれば、豊かになれる」という夢＝希望、つまり、「機会の平等」という幻想（「第9回 教育と格差の再生産 7.「機会の平等」は実現不可能」参照）を作り出していた。「機会の平等」という幻想が資本主義体制を支えているのである。経済が順調に成長している時期には、ほとんどの人が時の経過とともに豊かになり、一部の人は金持ちにもなれたので、この夢には現実性があった。しかし、経済が停滞し、「暗黒の情報社会」が到来すると、夢がかなうことはなくなる。現世での救いという夢が破れた時、信仰の道に入り来世での救いを求めるか、革命（暴力革命もあれば、平和的な革命もある）を起こし、自分たちに希望を与えてくれる経済・社会システムに変えるかのどちらかである。共産主義革命の夢は破れ、福祉社会も財源難あるいはグローバル経済化から行き詰まっている。「それほど能力がない人」でも努力すれば、そこそこ幸せな生活を送れた時代があったのではないか、昔の生活に戻れば、希望を持てるようになると考え、復古主義的な革命が起こる可能性がある。ただし、どのように復古すれば分かっておらず、「全ては新自由主義のせいである」「全てはグローバル化のせいである」というようなピント外れの主張をする人が

多いようである。新自由主義的な政策をとった結果、「暗黒の情報社会化」したのではない。新自由主義は「暗黒の情報社会化」を正当化するもっともらしい理屈に過ぎない。グローバル化の結果、「暗黒の情報社会化」したのではない。「暗黒の情報社会化」を推進している力である「情報の複製」の容易化・高速化・正確化がグローバル化を可能にしたのである。「暗黒の情報社会化」を防ぐには、「暗黒の情報社会化」を推進している力である「情報の複製」の容易化・高速化・正確化を可能にする技術を捨て去れば良い。「情報の複製」を困難にすれば、「それほど能力がない人」でも努力すればできるようになる「情報の複製」の仕事が戻ってきて、希望を持てるようになる。ただし、その結果、生産性は低下し、経済はマイナス成長になる。

公文俊平氏は『情報文明論』で、文明は包括・存続志向型文明と限定・発展志向型文明の大きく2つに分けられるとし、次のように述べている。

包括・存続志向型文明では、「社会変化過程は、……その社会自身のメンバーにとっては、過去の“黄金時代”に達成された完全な統合（帝国形成）や、過去の“聖賢”や“救世主”に発見もしくは啓示された究極的・絶対的な真理（聖書や教典）からの、乖離、退歩、衰退、墮落の過程でしかありえない。つまり、そこには主観的な意味での社会や知識の“進歩”や“発展”はありえず、“革新”といっても、それは過去に実現されていたが今では見うしなわれてしまった本道への復古・回帰の主張でしかないことになる」。限定・発展志向型文明では、「既成の普遍的イデオロギーに対抗する、より特殊化された原理に立脚する信念・知識体系をまず構築したりしていこうとする……社会変化が、その社会のメンバーの間では、“暗黒”で“野蛮”で“貧しい”過去から“明るく”て“開化”された“豊かな”未来にむかう不断の進歩・発展の過程として意識される」。(P.57-58)

「包括型の……代表例は、……“古典古代文明”（後期農耕・牧畜文明）群……であった。そこでの支配的なイデオロギーは“有史宗教”とよばれる……壮大な思想体系であり、……大帝国の建設と、かなりの長期間にわたるその維持に成功したのだが、技術知識の面では、めざましい発展や突破はしめすにいたらなかった。……有史宗教が統合した知識のほとんどは、個別的には以前の文明がすでに発見し、……蓄積していたものにすぎなかったと思われる。……限定型の……代表例は、古典古代文明が衰退していく中で、その周辺にあった西欧や日本などの地域における“文化革命”の結果として出現した“近代文明”群……であろう。……宗教的な真理の体系からは独立して進歩しはじめた科学や技術が、軍事や航海面での技術的突破……をまずもたらして、……産業革命……をも、……近代西欧文明……において、自生的に可能にした。そしてより近年では、……情報処理技術面での突破（情報革命）……も進行しはじめている」。(P.58-59)

「(1)衰退の淵にある包括・存続志向型文明の周辺に、限定・発展型の社会組織やイ

デオロギーを志向する文化革命が起こる。(2)新しく出現した限定・発展志向型文明の……ある段階で、……技術的突破が達成される。(3)新しい技術基盤に立脚して、エネルギー使用の量や効率の増大、経済成長、組織の拡大、制度の分化や複雑化が進展するとともに、それらを統合する仕組みもつくられていく。一連の技術的突破が繰り返され、文明は成長・発展をつづける。(4)しかし、やがては発展の限界に直面して、制度の硬直化が生じたり、社会の混乱や崩壊がおこったりする。(5)混乱や崩壊にひんした限定・発展志向型文明の中に、既存の社会組織やデオロギーの制約を乗り越えるような、包括的な組織やデオロギーの構築を志向する文化革命がおこる。(6)それを契機として、新たな包括・存続志向型文明の思想や制度が形成される。しかしここでは、特化や進歩よりも総合と保守が重視されるために、当初の組織的、デオロギー的統合が達成された後では、系統的成長は、知識、経済、組織、のいずれの面でも抑制される……。 (7)この包括・存続志向型文明は、……全体の傾向としては、過去の黄金時代から乖離して衰亡の一途をたどっていく。(P60-61)

私は、この公文俊平氏の見解を基本的には支持するが、“古典古代文明”が「衰亡の一途」をたどったのは、技術が「記号化」されておらず、技術を習得するためには、師匠や親方に弟子入りして、彼らの仕事の方法を見て、まねをする以外に方法がなかった、また、君主による恣意的な政治が行われた、つまり、「人的権威システム」に支配されていたため、「情報の複製」の容易化・高速化・正確化ができず、生産力の増強に失敗したからであり、“近代文明”が行った「技術的突破」とは、技術の記号化・マニュアル化、機械・コンピュータの利用、法治主義・官僚制、学校教育等による「情報の複製」の容易化・高速化・正確化、つまり、「記号的権威システム」の確立であり、「暗黒の情報社会」の到来により、「情報の複製」の容易化・高速化・正確化が限界（技術的な限界ではなく、人間の誇りを奪い、人間性を否定するということ）に直面すると、つまり、「記号的権威システム」が行き詰まると、「社会の混乱や崩壊」が起こると考えている。「暗黒の情報社会」を「乗り越えるような、包括的な組織やデオロギーの構築を志向する文化革命」がどのようなものになるかは分からないが、おそらく、それは偽物の「文化革命」であろう。

専門分野の「細分化」が進み、世界の全体像を把握することが困難な状況では、本物の「包括的な……デオロギーの構築」は困難である。世界のどこをどういう風に変えれば「暗黒の情報社会」から救われるのか分からないと感じている人々は、世界の全体像に関する単純明快な説明を与え、全ての問題を解決してくれる改革の方法を示してくれる全知全能の救世主を渴望するようになる。世界の全体像に関する単純明快な説明、全ての問題を解決してくれる改革の方法、全知全能の人間などありえないのに、人々は、苦しみの中で判断力を失い、救世主を自称するカリスマに騙され、「暗黒の文化革命」が起こるかもしれない。

歴史には法則性があるという考え方が間違っているのかもしれない。アメリカやイスラム世界における原理主義的な宗教運動には、“古典古代文明”を理想化し、そこに戻ろうとする「復古革命」の思想が見られる。新自由主義やグローバリズムに反対する人々には、第二次世界大戦が終わってから石油危機までの時代を「黄金時代」として理想化し、そこに戻ろうとする「復古革命」の思想が見られる。「文化革命」に失敗して、あくまでも「情報の複製」の容易化・高速化・正確化を進めようとする者（「記号的権威」にしたがう「擬似ロボット」）と「復古革命」をしようとする者（「人的権威」にしたがう「ロボットの人間」）との間の終わりのなき戦いが続く可能性がある。これは、理性・科学を信仰する者と伝統・宗教を信仰する者との間の宗教戦争でもある。理性・科学を信仰する者が勝利した暁には、「標準規格化」された遺伝子改造・子育て・教育により心が「標準規格化」され、既存の「記号的権威」と「方法的権威」を信仰する「擬似ロボット」だらけになり、誰も新たな「情報の創造」ができない「擬似ロボット文明」が生まれ、伝統・宗教を信仰する者が勝利した暁には、伝統・宗教を信仰しない者が抹殺されることにより、伝統・宗教への信仰により「標準規格化」された「ロボットの人間」だらけになり、誰も新たな「情報の創造」ができない「包括・存続志向型文明」が生まれるであろう。どちらの文明も、停滞し、衰亡に向かう。

<引用・参考文献>

- アーノルド・パーシー『世界文明における技術の千年史 「生存の技術」との対話に向けて』林武監訳、新評論、2001年
- 阿部謹也ほか『いま「ヨーロッパ」が崩壊する』光文社、1994年
- 池上知子・遠藤由美『グラフィック社会心理学』サイエンス社、1998年
- 池谷裕二『単純な脳、複雑な「私」』朝日出版社、2009年
- 井上俊他編『岩波講座 現代社会学第17巻 贈与と市場の社会学』岩波書店、1996年
- ウォルター・J・オング『声の文化と文字の文化』桜井直文・林正寛・糟谷啓介訳、藤原書店、1991年
- エーリッヒ・フロム『自由からの逃走』日高六郎訳、東京創元社、1965年
- 太田聡一・橘木俊詔『労働経済学入門』有斐閣、2004年
- 太田肇『選別主義を超えて 「個の時代」への組織革命』中公新書、2003年
- 尾木直樹・森永卓郎『教育格差の真実 どこへ行くニッポン社会』小学館101新書、2008年
- 金森修・中島秀人編著『科学論の現在』勁草書房、2002年
- 亀田達也・村田光二『複雑さに挑む社会心理学 適応エージェントとしての人間』有斐閣、2000年
- ガブリエル・タルド『模倣の法則』池田祥英・村澤真保呂訳、河出書房新社、2007年
- カール・オノレイ『スローライフ入門』鈴木彩織訳、ソニー・マガジズ、2005年

- 河合隼雄『母性社会日本の病理』講談社+α文庫、1997年
- 川上和久『情報操作のトリック その歴史と方法』講談社現代新書、1994年
- 菅野覚明『武士道の逆襲』講談社現代新書、2004年
- 荻谷剛彦『大衆教育社会のゆくえ 学歴主義と平等神話の戦後史』中公新書、1995年
- 公文俊平『情報文明論』NTT出版、1994年
- 斉藤貴男『機会不平等』文藝春秋、2000年
- 坂井克之『心の脳科学 「わたし」は脳から生まれる』中公新書、2008年
- 志水宏吉『学力を育てる』岩波新書、2005年
- ジョージ・リッツァ『マクドナルド化する社会』正岡寛司訳、早稲田大学出版部、1999年
- 「中央公論」編集部・中井浩一編『論争・学力崩壊』中公新書ラクレ、2001年
- トーマス・クーン『科学革命の構造』中山茂訳、みすず書房、1971年
- 中井浩一編『論争・学力崩壊2003』中公新書ラクレ、2003年
- 中根千枝『タテ社会の力学』講談社学術文庫、2009年
- 永山彦三郎『現場から見た教育改革』ちくま新書、2002年
- 橋本毅彦『〈標準〉の哲学 スタンダード・テクノロジーの三〇〇年』講談社、2002年
- 長谷川寿一・長谷川真理子著『進化と人間行動』東京大学出版会、2000年
- ハーバード・ビジネス・スクール・プレス『ハーバード・ビジネス・エッセンシャルズ[6] 創造力』石原薫訳、講談社、2003年
- 濱口桂一郎『新しい労働社会 一雇用システムの再構築へ』岩波新書、2009年
- 福田光宏「外在化した情報に支配される人間」『情報文化学会誌』第8巻第1号、2001年
http://www7.ocn.ne.jp/~mfukuda/inf_soc.html
- 福田光宏「情報社会観を巡る対立について」『情報文化学会誌』第7巻第1号、pp.29-36、2000年
<http://ci.nii.ac.jp/naid/110001882414>
- 福田光宏「情報と社会」『福田光宏のホームページ』
http://www7.ocn.ne.jp/~mfukuda/inf_soc.html
- 福地誠『教育格差が日本を没落させる』洋泉社新書、2008年
- マックス・ウェーバー『支配の社会学Ⅰ』世良晃志郎訳、創文社、1960年
- マックス・ウェーバー『支配の社会学Ⅱ』世良晃志郎訳、創文社、1962年
- 三浦展『下流社会 新たな階層集団の出現』光文社新書、2005年
- 森谷正規『文明の技術史観 アジア発展の可能性』中公新書、1998年
- 矢野正晴・柴山盛生・孫媛・西澤正巳・福田光宏『創造性の概念と理論』NII Technical Report (NII-2002-001J)、2002年
<http://www.nii.ac.jp/TechReports/02-001J-j.html>
- 山田昌弘『希望格差社会 「負け組」の絶望感が日本を引き裂く』筑摩書房、2004年
- 山田昌弘『新平等社会 「希望格差」を超えて』文藝春秋、2006年

- 山之内靖著『マックス・ヴェーバー入門』岩波新書、1997年
- 山本七平『「空気」の研究』文春文庫、1983年
- 山本七平『日本人と組織』角川書店、2007年
- 山本雅男『ヨーロッパ「近代」の終焉』講談社現代新書、1992年
- 養老孟司『バカの壁』新潮新書、2003年
- 吉田民人『情報と自己組織性の理論』東京大学出版会、1990年
- G.リッツァ・丸山哲央編著『マクドナルド化と日本』ミネルヴァ書房、2003年
- G.M.ホジソン『経済学とユートピアー社会経済システムの制度主義分析ー』岩森章孝・小池渺・森岡孝二訳、ミネルヴァ書房、2004年
- N・グレゴリー・マンキュー『マンキュー経済学I ミクロ編』足立英之ほか訳、東洋経済新報社、2000年
- P・F・ドラッカー『ポスト資本主義社会 21世紀の組織と人間はどう変わるか』上田惇生・佐々木実智男・田代正美訳、ダイヤモンド社、1993年
- Pritzker, S. R. & Runco, M. A. ed., (1999) “*Encyclopedia of CREATIVITY, Vol.1*”, Academic Press, San Diego, CA.
- Rosen, S.(1981). “The Economics of Superstars” *The American Economic Review, Vol. 71, No.5*, 845-858

(2011年9月30日初出、2011年11月10日改訂)

<福田光宏のホームページ> <http://fukuda.mond.jp/>